

韓国の倭系遺物

加耶地域出土の倭系遺物を中心に

Wa-style Relics in Korea: Wa-style Relics Excavated in the Gaya Region

高久健二

はじめに

① 研究史

② 3世紀後半～5世紀前葉の倭系遺物

③ 5世紀中葉～6世紀前半の倭系遺物

おわりに

【論文要旨】

本稿は加耶地域出土の倭系遺物を総合的に解釈し、韓国側における対倭交渉の実態およびその変化を明らかにすることを目的とする。具体的には加耶地域出土の倭系遺物を3世紀後半～5世紀前葉と5世紀中葉～6世紀前半の二時期に分けて、その出土様相、分布、時期などについて検討した。

その結果、まず3世紀後半～4世紀については、大成洞古墳群の倭系遺物が注目され、とくに大型木槨墓である大成洞13号墳に複数の倭系遺物が副葬されている点から、倭との交渉を主導していたのは金海の上位階層であり、これらを通じて倭系遺物がセットでもたらされたものと推定した。また、南部地域出土の土師器および土師器系土器は、その様相からみて、3世紀後葉～5世紀前葉に倭から渡来した人々が在地の集団とともに一定期間生活していたことを示すものであるが、倭人集団が数世代にわたって長期定住した可能性は低いと考えられる。したがって、その目的は政治的な移住などではなく、南部地域の鉄を入手するための比較的短期間の断続的な渡来ではなかったと推定される。また、倭系遺物の分布が南部海岸地域に集中しており、内陸部ではほとんど出土していないことからみて、当時の対倭交渉の窓口が南部地域に限定されていたものと推定した。

5世紀中葉～6世紀前半になると、内陸地域でも倭系遺物が出土するようになり、前時期に比べて分布域が拡大する。とくに、大伽耶の中心地である高霊地域では、池山洞古墳群などで倭系遺物が比較的多く出土している。しかし、倭系遺物の分布の拡大が、そのまま倭人の行動範囲の拡大を意味するものではなく、5世紀後半以後も倭が加耶と直接交渉する地域は、南部海岸地域に集中していた可能性を指摘した。5世紀後半になると内陸の大伽耶地域と、固城などの南部海岸地域とのネットワークが確立し、これに起因して倭系遺物の分布が内陸地域に拡大したものと考えられる。つまり、倭系遺物の拡大はこのようなネットワークを背景にして南部海岸地域から内陸部へ再分配された結果であり、加耶における倭人の活動範囲はかなり限定されていたのではないかと推定した。

はじめに

弥生時代～古墳時代には韓半島から日本列島へ多くの文物がもたらされたが、それらとは逆に列島から半島へという流れもわずかながらみられる。これら韓国出土の倭系遺物は、日本出土の韓国系遺物とともに相互交流の実態を明らかにできる重要な資料であり、本稿では、これまで個別に検討されることの多かった韓国出土の倭系遺物について、総合的な解釈を試みてみたい。とくに、倭系遺物そのものの評価よりは、韓国における倭系遺物の出土様相に着目して、韓国側における対倭交渉の実態およびその変化について考察してみる。

3世紀後半代になると、1世紀～3世紀前半にみられた北部九州の弥生小型仿製鏡や武器形祭器を中心とする倭系青銅器は姿を消し、古墳時代と関連する新たな倭系遺物が登場する。本稿では、古墳時代の倭と密接な関係をもっていた韓国南部の加耶地域で出土した倭系遺物を中心に検討してみる。対象時期は古墳時代の倭系遺物が出現する3世紀後半から大伽耶が滅亡する6世紀中葉までとするが、この時期の倭系遺物は、その種類と出土の様相などから、大きく3世紀後半～5世紀前葉と5世紀中葉～6世紀前半の二時期に分けられるので、それぞれの時期ごとに検討してみる。

①……………研究史

韓国三国時代の古墳副葬品の中に倭系遺物が存在することは、すでに日帝時代から注目されていた。1917年に調査された全羅南道羅州市大安里9号墳庚棺からは直弧文鹿角装鉄刀子が出土し、調査者の谷井濟一氏は葬法と出土遺物から潘南面古墳群を「倭人の遺跡」と解釈した〔谷井1920〕。また、同年に調査された慶尚南道咸安郡末伊山34号墳出土の直弧文鹿角刀装具については、調査当初より今西龍氏、梅原末治氏らによって日本からの輸入品であることが指摘されていた〔今西1920〕。さらに、梅原氏は慶州で出土する硬玉製勾玉、慶州・晋州出土の仿製鏡、小倉コレクション（伝・釜山市蓮山洞古墳群出土）の三角板鋌留短甲なども倭系遺物とし、一部に列島から半島への影響があったことを指摘した〔梅原1947〕。また、これらの倭系遺物は任那日本府の存在と結びつけて解釈される場合も多かった。

戦後の倭系遺物に関する研究は多岐にわたっているが、個別の遺物に関するものと、それらを総合的に検討するものの二方向に大きく分けられる。まず、前者については、土器、鏡、甲冑などに関する研究がある。この中でも土器は倭系遺物研究の主流を占めるものであり、これまでも多くの研究成果が出されている。1980年に行われた慶尚南道金海市府院洞遺跡の調査は、韓国出土の土師器研究における画期であり、その報告書でA地区Ⅳ・Ⅴ層から出土した二重口縁壺と高杯について、弥生後期土器あるいは古墳時代の土師器と器形上、極めて類似していることが指摘されている〔沈奉謹1981〕。同じ頃、日本においてもこれらの土器や華明洞古墳群出土の内湾口縁甕などが布留式土器と共通する点が大竹弘之氏によって指摘されている〔大竹1982〕。ただし、この時点ではまだこれらの土器の系譜を断定できる段階ではなかった⁽¹⁾。

その後、1980年代後半から韓国出土の土師器研究が本格化する。まず、武末純一氏は異質文化

圈の土器の認定原則を整理した上で、韓国における布留式系甕に着目し、北部九州との併行関係および韓国における布留式系甕の展開過程について考察している。その結果、韓国出土の布留式系甕はa類（宮の前期併行）・b類（有田Ⅰ期併行）・c類（有田Ⅱ期併行）の3類に分類され、このうちa・c類は搬入品・忠実型に留まるのに対し、b類には変換・変容型がみられることから、後者は不安定ながらも在地の様式構造に部分的に受容されたことを指摘した〔武末1988〕。また、韓国出土の小形丸底埴にも注目し、これらは列島における有田Ⅰ期（4世紀後半）の小形丸底埴が伝播したものであり、在地の土器様式内に取り入れられたとした。さらに5世紀代になると、それらが陶質化した広口小壺が逆に列島にもたらされた点を指摘した〔武末1989〕。

安在皓氏は新羅・加耶地域出土の赤褐色軟質土器のうち、日本の古式土師器の器形や製作技法が加えられたものを土師器系軟質土器とし、これら新羅・加耶土器様式の中に定着した土師器系軟質土器は、日本列島人が定着して製作したものであるとした。さらに、4世紀前半～5世紀前半をⅠ～Ⅴ段階に分けて土師器系軟質土器の様相を検討し、土師器系軟質土器の忠実型（搬入品を含む）が比較的多いⅠ段階（3世紀後葉～4世紀前葉）とⅢ段階（4世紀後葉）をそれぞれ列島人の第1次移住期、第2次移住期とした。そして、第1次移住期の契機を近畿地域の布留式土器が列島全域に拡散する状況に、第2次移住期の契機を文献に現れる4世紀後半代の倭の進出に求めている〔安在皓1993〕。この見解については武末氏も基本的に賛同しており、さらに、これらの事象は大成洞古墳群で倭系遺物が北部九州系から近畿系に交替することとも一致し、そこには倭政権と金官加耶政権との鉄をめぐる動きが反映されていることを付け加えている〔武末1998〕。

これに対し、申敬澈氏は4世紀後葉の忠実型土師器系土器の存在を倭の進出と結びつけるのは、旧態依然とした任那日本府説と脈を同じくするものであるとして批判し、忠実型土師器系土器の再検討を行った。土師器系土器をⅠ～Ⅵ段階に編年して検討した結果、忠実型はⅠ段階（3世紀末）とⅡ段階（4世紀第1四半期）に限られ、Ⅲ段階（4世紀第2四半期）以降は土師器の搬入品はなく、すべて在地産の土師器系土器であると主張する。また、嶺南地域の土師器系土器が畿内系ではなく、ほとんどが北部九州系や山陰系土師器であることから、三国時代における韓半島南部社会の対倭交渉の窓口は畿内に一元化されるのではなく、列島各地に多元化するものとしている。さらに、土師器系土器の存在は倭人集団が加耶・新羅地域に定着したことを示すとした上で、彼らは倭が加耶から鉄を入手する代わりに提供された労働力であったと指摘する〔申敬澈2001〕。

このようにこれまでの研究では、嶺南地域出土の土師器は倭人集団の定着を示すという点と、その背景に加耶の鉄を入手する目的があった点ではほぼ一致しているといえる。ただし、搬入品・忠実型土師器の時期や倭人集団の性格については、見解が異なっている。

韓国出土の須恵器については、酒井清治氏が集成を行い、それらの所属時期を明らかにした上で、これらは韓半島における倭人の能動的な交易活動、軍事活動、文化の受容などによる交流を示しているとした〔酒井1993〕。また、申鐘煥氏も新鳳洞90B-1号墳出土の倭系・加耶系遺物を検討した結果、当該古墳出土の蓋杯に須恵器が含まれている可能性が高いとし、その被葬者は加耶・倭と密接な関連をもった人物であると指摘している〔申鐘煥1996〕。

その他の遺物のうち、鏡については、小田富士雄氏が韓国出土の倭鏡の集成を行い、日本における類例を検討するとともに、その所属時期を明らかにした結果、4世紀後半～5世紀前半（Ⅰ期）

と5世紀後半～6世紀前半(Ⅱ期)に大別されるとした。そして、Ⅰ期は4世紀後半に始まる倭政権と加耶・新羅との軍事的交渉が、Ⅱ期は532年の金官加耶の新羅併合へと至る新羅・百済・加耶と倭政権との交渉がそれぞれ背景にあると考察している。また、慶州出土の倭鏡は加耶諸国を中介とした二次的搬入によるものであることを示唆している。

韓国出土の三角板革綴短甲や横矧板鋌留短甲などの帯金式甲冑については、日本のものと同一型式であり、畿内の古墳に大量副葬されている点や甲冑のセット関係に乱れがある点などから、日本からの搬入品であるとする見解〔穴沢・馬目 1975b, 藤田 1985〕と、共伴遺物に日本からの舶載品がみられない点や、蝶番の形態的な違いなどを根拠として韓国で生産されたものであるとする見解〔小林 1982, 鄭澄元・申敬澈 1984, 宋桂鉉 1993〕に大きく分かれており、いまだ一致していない。ただし、近年、申敬澈氏が日本からの搬入品、あるいはその影響によるものとする見解に転換している点は注目される〔申敬澈 2000〕。

次にこれらの倭系遺物を総合的に検討したものについてみてみる。まず、西谷正氏は加耶地域と北部九州との交流を論じるなかで、韓国出土の倭系遺物、とくに銅鏡、筒形銅器、子持勾玉、直弧文刀装具、帯金式甲冑、須恵器などについて検討し、微量ではあるが倭製品が韓国へもたらされていることに注目している。そして、これらの倭製品の流入背景について、国家レベルの外交とともに、北部九州の有力豪族が独自に加耶・百済・新羅と交渉するという外交の二重構造をあげている〔西谷 1977・1983〕。

柳田康雄氏は弥生～古墳時代の倭系遺物を集成し、弥生時代の倭系遺物が洛東江流域に集中するのに対し、古墳時代になると洛東江流域以外に分布範囲が拡大することを指摘した。また、倭系土器については、4世紀後半から布留式土器が見られるようになるが、4世紀初頭以前は北部九州、とくに西新式土器との関係が強調されている。そして、倭系遺物のなかに韓半島側ではとくに必要としない日常雑器や精神文化としての祭祀道具が含まれていることなどから、倭人の流入を示すものであると解釈している⁽³⁾〔柳田 1989・1990・1992a・b〕。

朴天秀氏は列島における半島系文物と半島における列島系文物について、一方向的な伝播論ではなく、相互作用という視点から再検討している。その結果、対倭交渉の主導権が金海・釜山地域を中心とする金官加耶圏(3～4世紀)→高霊を中心とする大伽耶圏(5世紀中葉)→百済地域(6世紀)と転換し、これらは両地域間の政治的変動と密接な関係があることを明らかにした。とくに、大伽耶は5世紀後半に百済と倭との交渉を主導することによって、金官加耶、阿羅伽耶、小伽耶を制圧し、加耶の中心国としての地位を確立したと主張する。

以上、加耶地域出土の倭系遺物に関する研究史を整理した結果、土器を中心として様々な角度から検討が行われてきたことがわかる。とくに大きな変化は、1990年代に入ってから日韓両国の研究者によって活発に議論がなされるようになった点があげられ、その背景にはやはり大成洞古墳群の調査成果が大きく作用しているものと考えられる。さらに、1990年代後半以降、倭系遺物の存在を加耶史の中に正しく位置づけようとする動きが、韓国側にみられる点は注目される。しかし、倭系遺物の解釈については、いまだ見解が一致しない部分が少なくなく、検討の余地は残されている。これらの研究史を踏まえた上で、以下では加耶地域出土の倭系遺物について、その出土様相、分布、時期などを検討することによって、未解決の問題点についてアプローチしてみたい。

②…………… 3 世紀後半～5 世紀前葉の倭系遺物

1 大成洞・良洞里遺跡出土の倭系遺物

大成洞遺跡は金海市街西側の独立小丘陵上に位置する墳墓遺跡であり、1990～1992年に、慶星大学校博物館によって3次にわたる発掘調査が行われた[申敬澈・金宰佑 2000 a・2000 b]。これらの調査で1～7世紀に築造された木棺墓37基、木槨墓44基、石室墓35基、甕棺墓14基、その他10基の計140基の墳墓が確認された。大成洞遺跡出土の倭系遺物には巴形銅器と各種石製品があり、これらはおもに4～5世紀前葉に築造された木槨墓から出土している⁽⁴⁾。まず、巴形銅器は2号墳(木槨墓：4世紀後葉)から1点(図1-24)、13号墳(木槨墓：4世紀中葉)から6点(図1-17～21)、23号墳(木槨墓：4世紀中葉)から破片2点が出土している。また、石製品については2号墳から緑色凝灰岩製鏃形石製品2点(図1-22・23)、13号墳から緑色凝灰岩製鏃形石製品15点(図1-1～15)と滑石製異形石製品1点(図1-16)、18号墳(木槨墓：4世紀中葉)から緑色凝灰岩製紡錘車形石製品1点(図1-25)・碧玉製管玉16点(図1-27)・翡翠製勾玉1点(図1-28)、46号墳(木槨墓：3世紀後半)から筒形石製品(玉杖?)1点(図1-26)が出土している。

これらの遺物を副葬した墳墓の多くは、全長6m以上の墓壙をもつ大型木槨墓である。とくに、巴形銅器6点と鏃形石製品15点副葬されていた13号墳は、約6m×4mの主槨と3.7m×4mの副槨からなる木槨墓であり、4世紀中葉の大成洞古墳群では最大クラスに属する。副葬品についても盗掘・破壊を受けていたにもかかわらず多数の土器類や鉄器類が出土している。また、2号墳も850×480cmの墓壙をもつ大型木槨墓であり、多数の土器類とともに鉄製武器類、短甲、冑、轡などが副葬されていた。東側短壁付近には鉄鋌110枚が置かれており、主体部の規模、副葬品の量と質からみて、4世紀後半代の首長墓と推定される。このように大成洞遺跡においては大型の首長墓から倭系遺物が出土している点が特徴といえる。また、2号墳や13号墳のように、巴形銅器と鏃形石製品がセットで出土しているという点は、これらが一括品でもたらされたことを示唆する。これらの点は後述する良洞里遺跡の場合と様相が異なるといえる。

この他に従来から倭系遺物ではないかと指摘されているものに筒形銅器がある⁽⁵⁾。大成洞遺跡では2号墳で2点、18号墳で2点、1号墳(木槨墓：5世紀前半)で8点、11号墳(木槨墓：5世紀前葉)で1点、15号墳(木槨墓：4世紀前半)で1点、39号墳(木槨墓：4世紀後葉)で2点が出土している。これらの古墳は大型のものが多くことから、筒形銅器は上位階層の古墳に副葬される傾向が強いといえる。2号墳と18号墳では倭系遺物と筒形銅器が共伴しているが、いずれも上位階層の古墳であることを考慮すると、両者は必ずしも相関関係が高いとはいえない。また、このように上位階層の墳墓に集中するという現象は、日本の畿内地域のように、筒形銅器の副葬が大型古墳に限らないという現象と対照的といえる。

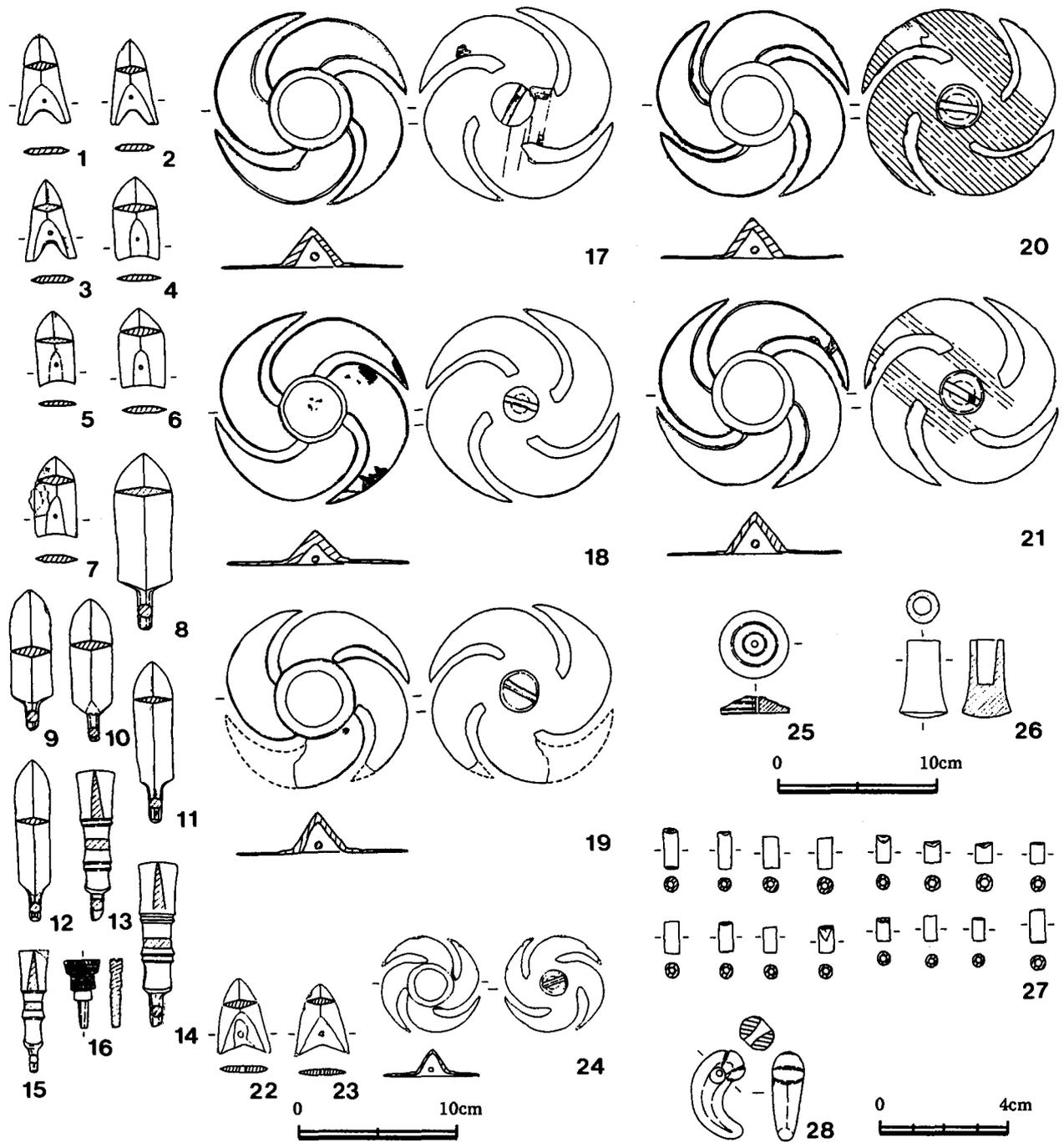
良洞里遺跡は洛東江下流に広がる金海平野の西端部に位置する墳墓群である。1990～1996年にかけて東義大学校博物館によって行われた発掘調査で木棺墓8基、木槨墓387基、竪穴式石室墓30基、甕棺墓66基、石棺墓1基、その他9基の計501基の墳墓が調査された[林孝澤・郭東哲 2000]。これらの調査によって当時の倭との交渉を示す資料が多数出土したが、4世紀代に該当す

るものとしては303号墳（木槨墓）出土の碧玉製紡錘車形石製品1点と441号墳（木槨墓）出土の仿製方格規矩鏡1面があげられる。このうち441号墳は主槨と副槨からなる木槨墓であるが、主槨の墓壙規模は495×245cm、木槨規模は415×150cmであり、同時期の墳墓の中では中型クラスに当たる。303号墳は詳細が未報告であるが、副槨をもたない単槨の木槨墓であり、最上位階層の墳墓とはいえない。また、これらの倭系遺物はそれぞれ1点ずつが副葬され、他の倭系遺物を共伴していないことからみて、再分配品である可能性も考えられる。3世紀前半までは162号墳や200号墳などのような大型木槨墓から北部九州と関連する倭系遺物が出土しているのに対し、4世紀代になると大成洞古墳群でみられるような巴形銅器や石製品などの倭系遺物が大型古墳に副葬されなくなる点は、良洞里遺跡における大きな変化であると考えられる。

筒形銅器は304号墳（竪穴式石室墓：4世紀後葉）、331号墳（木槨墓）、340号墳（木槨墓：4世紀後半）、443号墳（木槨墓）、447号墳（木槨墓）などから合計14点が出土しているが、他の倭製品は共伴していない。これらの古墳は比較的大型のものが多く、とくに304号墳は主槨と副槨からなり、主槨の墓壙規模は615×345cmである。副葬品も多く、多数の土器類や鉄器類とともに2本の環頭大刀が副葬されていたことから、4世紀後半代の良洞里遺跡の中では上位階層に属するものと推定される。また、304号墳では4本の筒形銅器が副葬されており、前述した倭系遺物とは出土様相が異なる。このように筒形銅器が上位階層の古墳に副葬され、倭系遺物が共伴しないという点は、前述した大成洞遺跡と共通する現象といえる。

以上のような韓国南部地域出土の巴形銅器、各種石製品については、おおむね倭系遺物であるという見解で一致しているが、これらのほとんどは大成洞古墳群と良洞里古墳群で出土しており、金海地域の特異性が浮かび上がる。慶尚北道慶州市月城路7-29号墳（4世紀後半）でも緑色凝灰岩製石釧が出土しているので〔国立慶州博物館・慶北大学校博物館1990〕、今後、慶州地域で出土する可能性も残されているが、大成洞遺跡のように一括で出土する可能性は低いのではないだろうか。これら倭系遺物を副葬した古墳の多くは、大成洞2・13・18・23号墳のように、全長6m以上の墓壙をもつ大型木槨墓であることから、金官加耶と倭との交渉を主導していたのは大成洞古墳群の上位階層であったものとみられる。

一方、筒形銅器に関しては、当初は倭系遺物であるという見解が有力であったが、近年、福泉洞古墳群、良洞里古墳群、大成洞古墳群などで、出土例が増加し、出土地不明品と合わせるとかなりの数に上ることから、必ずしも倭の製品と考える必要はないとする見解も出されている。前述したように良洞里遺跡や大成洞遺跡においては、倭系遺物との相関関係もそれほど高いとはいえないようである。韓国出土の筒形銅器は現在、58例が確認されており、日本での出土数を凌ぐ勢いである。製作地の解明には出現・消滅の時期確定など今後解決すべき課題も少なくないが、製作地はいずれにせよ、日韓の交渉を示す資料であることは間違いない。また、韓国における筒形銅器の分布が金海・釜山を中心とする南海岸東部に集中していることも、対倭交渉の窓口を理解する上で注目される。

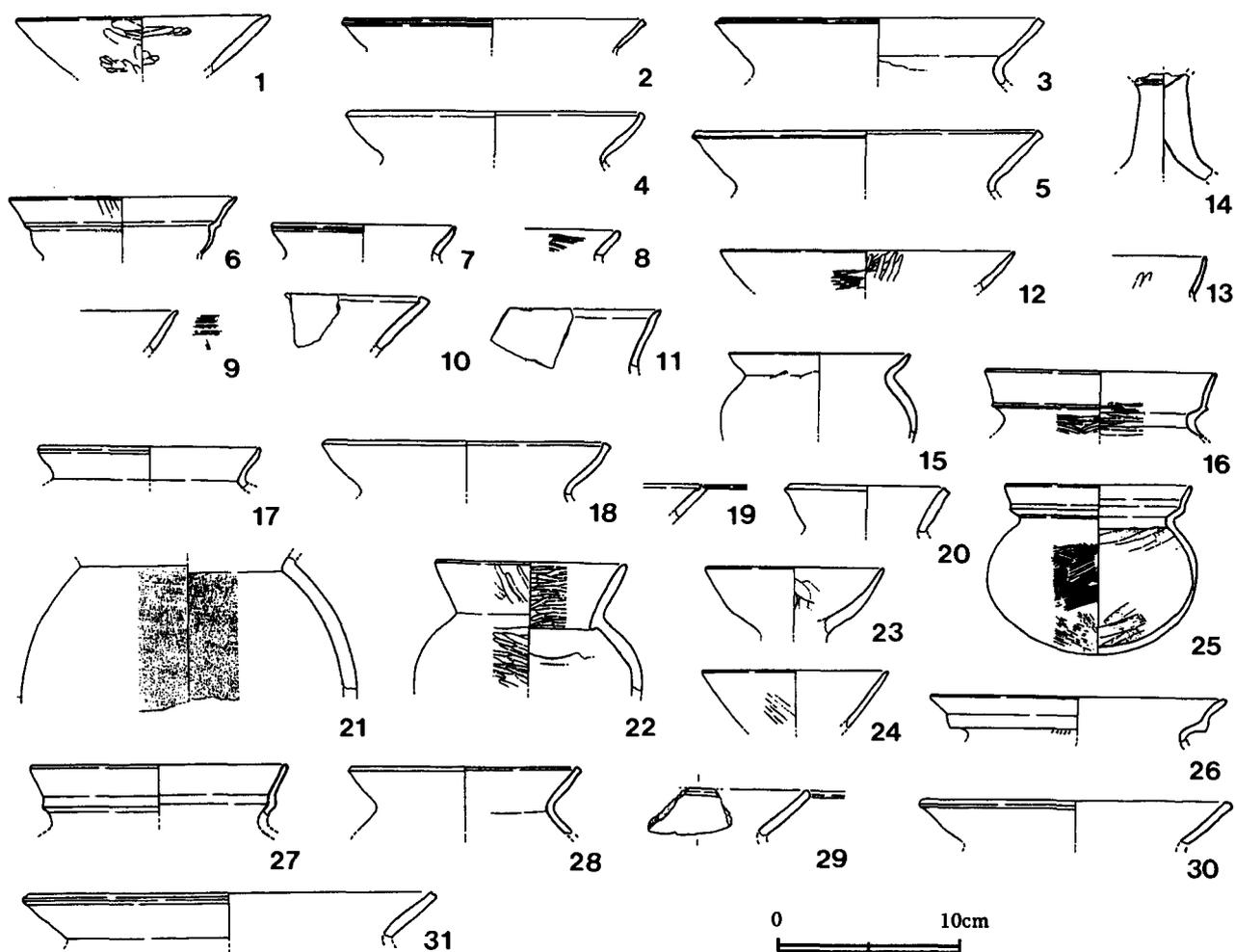


1~21 : 13号墳, 22~24 : 2号墳, 25・27・28 : 18号墳, 26・46号墳

図1 大成洞古墳群出土の倭系遺物

2 南部地域出土の土師器と土師器系土器

研究史で述べたように、これまでも武末純一氏 [武末1988・1989・1993・1998], 安在皓氏 [安在皓1993], 申敬澈氏 [申敬澈2001] によって詳細な研究が進められている。南部地域の土師器や,



1：Fピット7層，2～14：Fピット8層，15・16：Fピット9層，17～26：Fピット10層，27：Fピット12層，
28～31：Jピット攪乱層

図2 東萊貝塚出土の土師器および土師器系土器

それらを模倣した土師器系土器はおもに釜山市東萊貝塚，慶尚南道金海市府院洞遺跡，同・鎮海市龍院遺跡，同・馬山市県洞8号墳など，3～4世紀代の集落跡や古墳などから出土しており，以下，個別に検討してみる。

まず，東萊貝塚は低丘陵の西南側斜面に形成されており，本来はかなり大規模な遺跡を形成していたものと推定されている。現在は海岸線からかなり内陸に入り込んでいるが，貝塚は海水性貝で構成されていることから，遺跡形成時は海岸線に近かったものと推定される。1967～1970年の国立中央博物館による発掘調査で小型の製鉄炉跡が検出され，鉄滓や焼土が多量に堆積している状況が確認された〔殷和秀ほか1998〕。その後，1993年には釜山市立博物館によって発掘調査が行われている〔洪潜植1997〕。土師器および土師器系土器はおもに釜山市立博物館の調査区域で出土している。まず，Fピットでは7層から小型器台片1点（図2-1），8層から壺あるいは甕の口縁部片9点（図2-2～10），広口小壺片1点（図2-11），小型器台片2点（図2-12・13），高杯脚部片1点（図2-

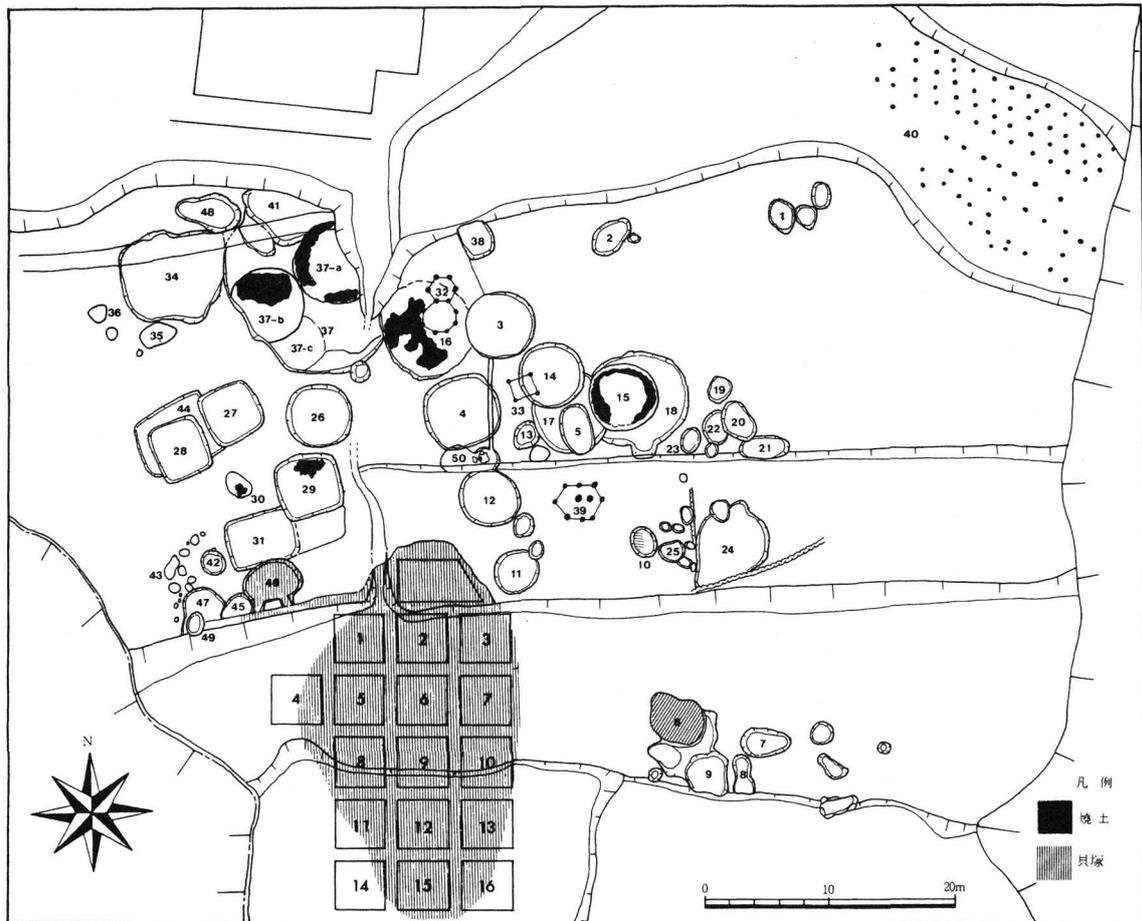
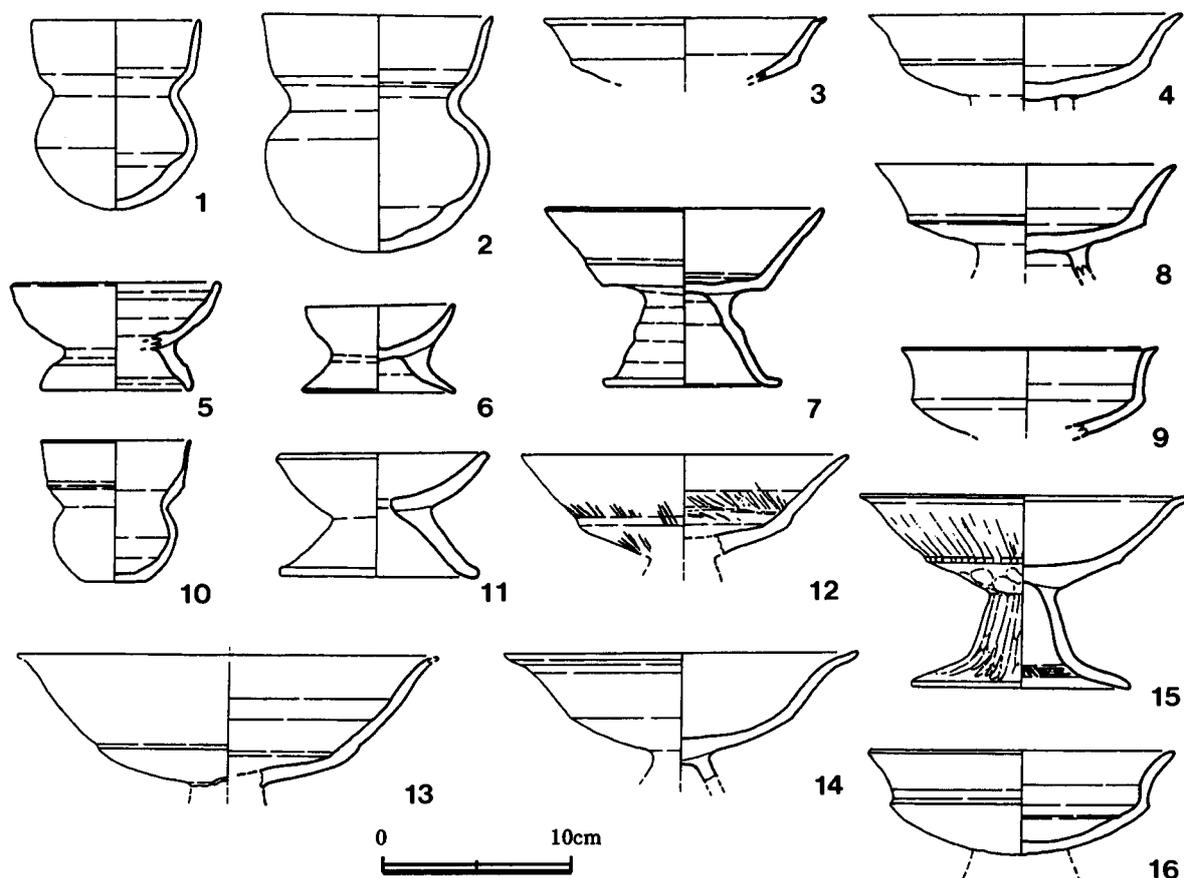


図3 龍院遺跡遺構配置図

-14), 9層から甕1点(図2-15), 二重口縁壺片1点(図2-16), 10層から壺あるいは甕の口縁部片4点(図2-17~20), 壺胴部片1点(図2-21), 小型壺1点(図2-22), 小型器台片2点(図2-23・24), 二重口縁壺1点(図2-25), 二重口縁壺口縁部片1点(図2-26), 12層から二重口縁壺口縁部片1点(図2-27), Jピット攪乱層から甕口縁部片4点(図2-28~31)が出土している。このうちFピット8層出土の甕口縁部片2点(図2-4・10), Fピット9層出土の二重口縁壺片1点(図2-16), Fピット10層出土の甕口縁部片1点(図2-18), 小型壺片1点(図2-22), 二重口縁壺1点(図2-25), Jピット攪乱層出土の甕口縁部片1点(図2-28)は日本からの搬入品あるいは忠実型である可能性が高いとされる。また, 二重口縁壺については山陰系土師器と推定され, 水佳里貝塚や後述する龍院遺跡などでも出土している。土師器および土師器系土器が比較的多く出土しているFピット8~10層の年代については, 共伴出土している炬形土器などの形態からみて, 3世紀中葉~4世紀前葉に収まるものと推定される。また, 同じく釜山市の朝島貝塚からも布留式段階と推定される土師器系土器(甕, 高杯, 小型器台)が出土している[韓炳三・李健茂1976]。

次に龍院遺跡は海岸に面した海拔30m前後の独立丘陵上に位置する集落遺跡であり, 1994年に東亜大学校博物館によって発掘調査が行われた[沈奉謹・李東注1996]。丘陵上部の平坦面に住居が

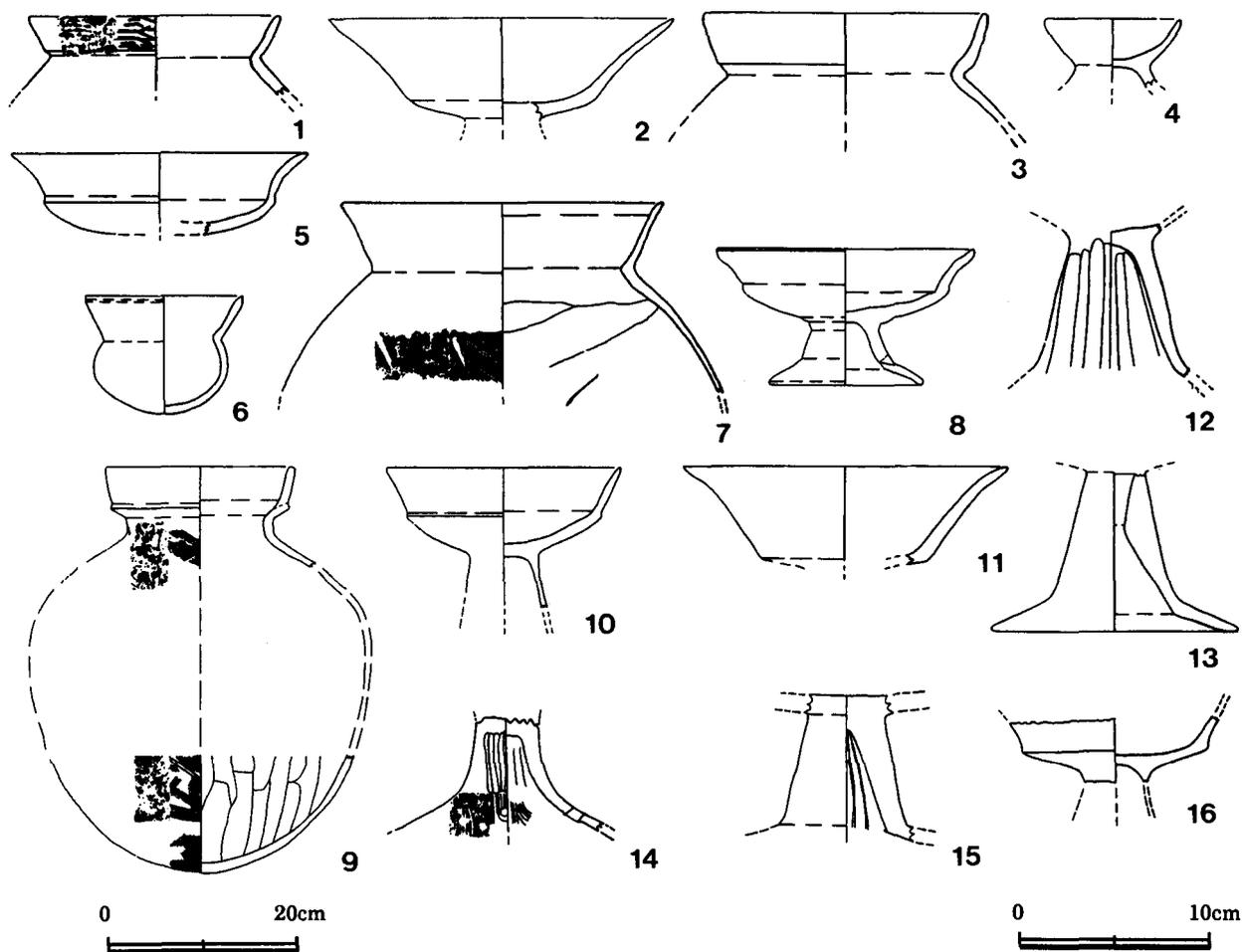


1・2：第10号遺構， 3：第23号遺構， 4：第26号住居跡， 5～7：第37号住居跡， 8・9：第45号遺構， 10：第50号遺構， 11：貝塚頂上部ピット， 12：貝塚第5ピット， 13・14：貝塚第6ピット， 15：貝塚第9ピット， 16：貝塚第IV層

図4 龍院遺跡出土の土師器および土師器系土器

位置し、その南側斜面に貝塚が形成されている（図3）。住居跡は21基が確認され、その中には火災住居もいくつか含まれている。貝塚は住居群南側の浅い谷部に細長く形成されており、最上層を除いて、すべてが未攪乱である。土師器と推定される土器は、第23号遺構で高杯1点（図4-3）、貝塚頂上部ピットで小型器台1点（図4-11）、貝塚第5ピットで高杯1点（図4-12）、貝塚第9ピットで高杯1点（図4-15）、貝塚第IV層から高杯1点（図4-16）の合計5点が出土している。高杯はいずれも布留式中～新段階に該当するものと推定される。また、土師器系土器は、第10号遺構で二重口縁壺2点（図4-1・2）、第26号住居跡で高杯1点（図4-4）、第37号住居跡で小型器台2点（図4-5・6）と高杯1点（図4-7）、第45号遺構で高杯2点（図4-8・9）、第50号遺構で二重口縁壺1点（図4-10）、第6ピットで高杯2点（図4-13・14）の11点が出土している。このうち、二重口縁壺は山陰系土師器を模倣したものと推定される。

龍院遺跡の場合、集落南側斜面の谷部を埋めるように貝塚が形成されていた。貝層の堆積状況を見ると、丘陵上部から下部へと順次堆積していったものと推定されることから、頂上部ピットが相対的に最も古く、下部のピットに行くにつれ時期が下るものと考えられる。つまり、頂上部ピットで出土した小型器台と第9ピット出土の高杯には時期差が想定される。貝塚頂上部ピット出土の小



1: A地区Ⅰ層, 2: A地区Ⅱ層, 3~5: A地区Ⅲ層, 6~8: A地区Ⅳ層, 9~13: A地区Ⅴ層, 14~16: C地区

図5 府院洞遺跡出土の土師器および土師器系土器

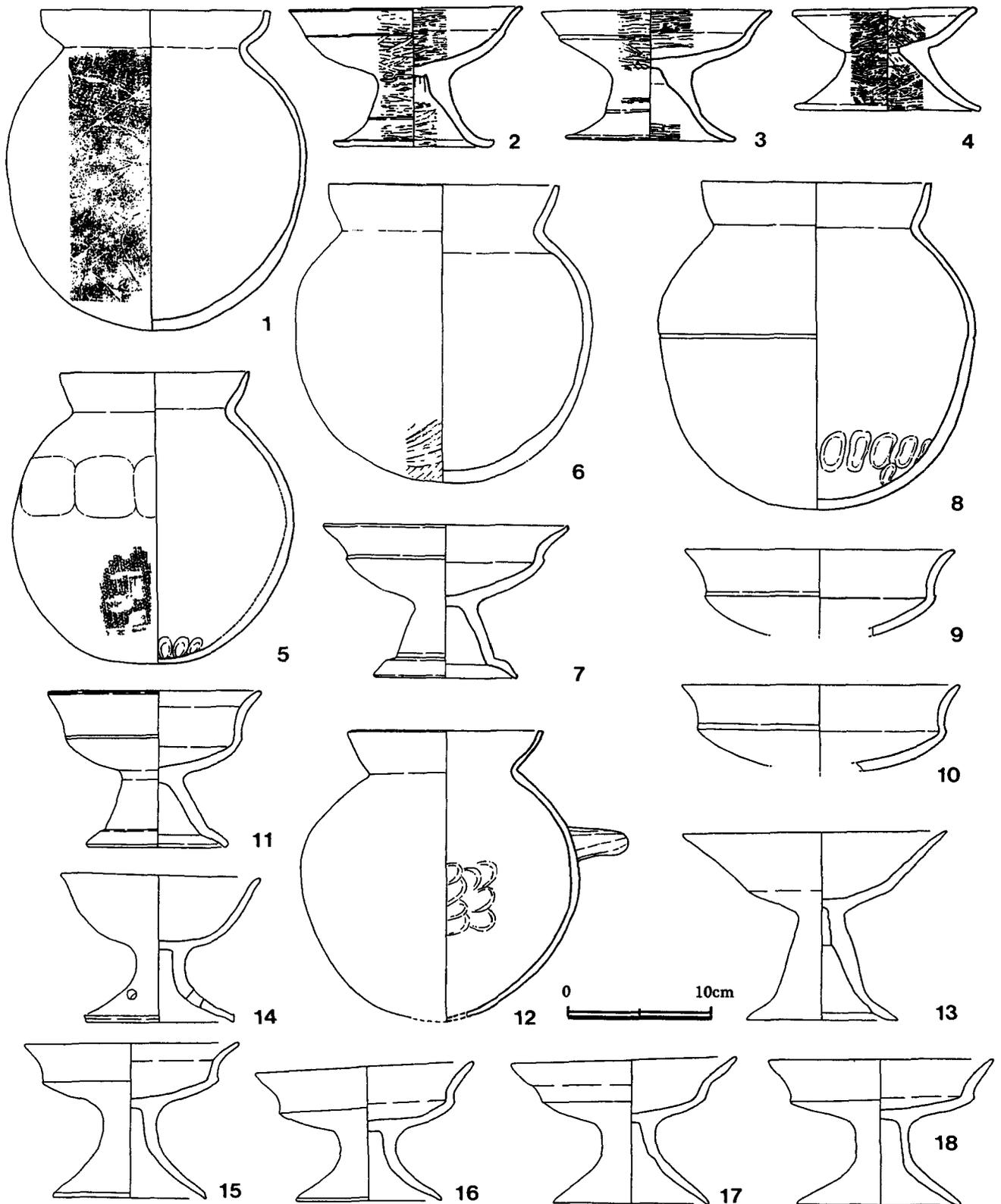
型器台と類似したものが、福泉洞 57 号墳から土師器系高杯・甕とともに出土している。福泉洞 57 号墳は主槨と副槨からなる大型木槨墓であり、報告者は 4 世紀中葉に編年している⁽⁷⁾。一方、第 9 ピットでは硬質長脚外折口縁高杯が出土していることからみて、4 世紀後葉~5 世紀初頭と考えられる。したがって、龍院遺跡出土の土師器、および土師器系土器の年代については、東萊貝塚に後続する 4 世紀中葉~5 世紀初頭と推定され、これは前述したように高杯が布留式中~新段階に位置づけられることとも矛盾しない。

最後に府院洞遺跡は金海市街地の南西側に位置する集落遺跡であり、1980 年に東亜大学校博物館によって発掘調査が行われた [沈奉謹 1981]。調査区は中央の南山を挟んで西側に A 地区、東側に B・C 地区が位置している。まず、A 地区は緩やかな斜面に貝層が形成されており、龍院遺跡などの例からみて、この貝塚にともなう集落はその上部に位置していたものと推定される。層位は上部からⅠ~Ⅴ層に分けられるが、土師器および土師器系土器と推定されるものはⅠ層から甕 1 点 (図 5-1)、Ⅱ層から高杯 1 点 (図 5-2)、Ⅲ層から甕 1 点 (図 5-3)、小型器台 1 点 (図 5-4)、高杯 1 点 (図 5-5)、Ⅳ層から小形丸底埴 1 点 (図 5-6)、甕 1 点 (図 5-7)、高杯 1 点 (図 5-8)、Ⅴ層から二

重口縁壺1点(図5-9)と高杯4点(図5-10~13)が出土している。また、C地区からは土師器および土師器系土器として、高杯3点(図5-14~16)が出土している。これらの土師器および土師器系土器はいずれも布留式土器が主体を占めており、とくにA地区出土のものは布留式中~新段階のものが多い。したがって、これらは龍院遺跡とほぼ同じ時期に位置づけられるものと考えられるが、A地区の下限年代はもう少し下るものと推定される。また、府院洞遺跡と市街地を挟んで西側に位置する鳳凰台遺跡においても布留式甕と推定される土師器系土器が出土している[徐鈴男ほか1998]。

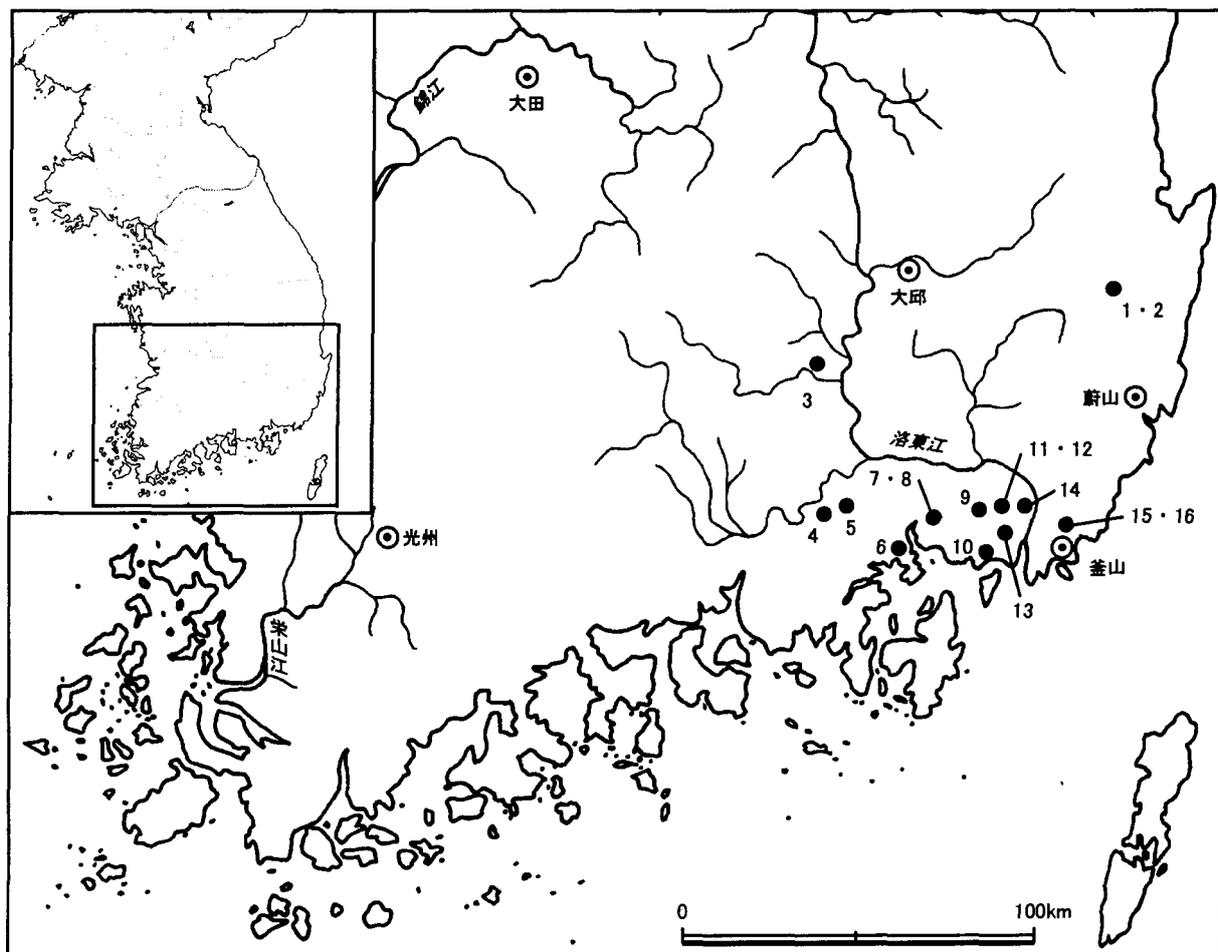
次に古墳出土の土師器および土師器系土器について検討してみる。これまで土師器系土器の出土が報告されている古墳群としては福泉洞古墳群、華明洞古墳群、礼安里古墳群、大成洞古墳群、県洞古墳群などがあげられる。まず、福泉洞古墳群では57号墳(木槨墓:4世紀中葉)から甕1点(図6-1)、高杯2点(図6-2・3)、小型器台1点(図6-4)[李在賢ほか1996]、93号墳(竪穴式石槨墓:5世紀前葉)から甕1点(図6-5)が出土しており[李賢珠1997]、華明洞古墳群では採集品として甕1点(図6-6)が報告されている[金廷鶴・鄭澄元1979]。礼安里古墳群では11号墳(竪穴式石槨墓:4世紀後葉)から高杯1点(図6-7)、31号墳(竪穴式石槨墓:4世紀中葉)から甕1点(図6-8)、97号墳(竪穴式石槨墓:4世紀後葉)から高杯2点(図6-9・10)、103号墳(土壙墓:4世紀後葉)から高杯1点(図6-11)、大成洞古墳群では13号墳(木槨墓:4世紀前半)から甕1点(図6-12)が出土しており[申敬澈ほか1985、安在皓ほか1993]、県洞古墳群では8号墳(木槨墓:5世紀前葉)から高杯1点(図6-13)、22号墳(木槨墓:5世紀前葉)から高杯1点(図6-14)、43号墳(木槨墓:5世紀前葉)から高杯4点(図6-15~18)が出土している[李盛周・金亨坤1990]。このうち県洞8号墳出土の高杯については搬入品の可能性が高いとされる[安在皓1993]。これら古墳出土の土師器および土師器系土器はおおむね4世紀~5世紀前葉に位置づけられ、前述した集落の場合とほぼ同様である⁽⁸⁾。また、福泉洞古墳群、礼安里古墳群、大成洞古墳群などの近隣には、土師器および土師器系土器が出土する集落遺跡が存在しているという点も注目される。古墳の規模をみると、福泉洞古墳群や大成洞古墳群など大型古墳に副葬されている例もあるが、礼安里古墳群など中・小型古墳にも副葬されており、階層的関係と直接的には結びつかないようである。また、福泉洞57号墳や県洞43号墳ではそれぞれ4点の土師器系土器が副葬されているが、他はいずれも1~2点であり、セットで副葬される場合は必ずしも多くはない。他の倭系遺物との共伴関係をみると、大成洞13号墳で巴形銅器などと共伴しているが、その他は土師器のみの出土であり、相関関係は高くない。

このように韓国南部地域の集落跡や古墳群からは土師器やそれを模倣した土師器系土器が一定量出土しており、とくに集落遺跡から出土していることは、倭からの渡来人たちが在地の集団とともに一定期間生活していたことを示している。また、彼らの渡来時期については、龍院遺跡などの例からみて、3世紀後葉~4世紀前葉や4世紀後葉に必ずしも限定されるものではなく、3世紀後葉~5世紀前葉の期間に断続的に渡来したのではないかと推定される。しかし、集落遺跡における土師器や土師器系土器の出土量は極めて少なく、多数の倭人が集団で定住していたとは考えにくい⁽⁹⁾。また、龍院遺跡では搬入品および忠実型土師器とそれらを模倣した土師器系土器がほぼ同時期に併存しており、必ずしも搬入品や忠実型土師器が古く、土師器系土器が新しいとはいえないことがわかる。これは土師器→土師器系土器という変化が比較的短期間に断続的に繰り返された結果であり、



1~4: 福泉洞 57号墳, 5: 福泉洞 93号墳, 6: 華明洞古墳群採集品, 7: 礼安里 11号墳, 8: 礼安里 31号墳, 9・10: 礼安里 97号墳
 11: 礼安里 103号墳, 12: 大成洞 13号墳, 13: 県洞 8号墳, 14: 県洞 22号墳, 15~18: 県洞 43号墳

図6 古墳出土の土師器および土師器系土器

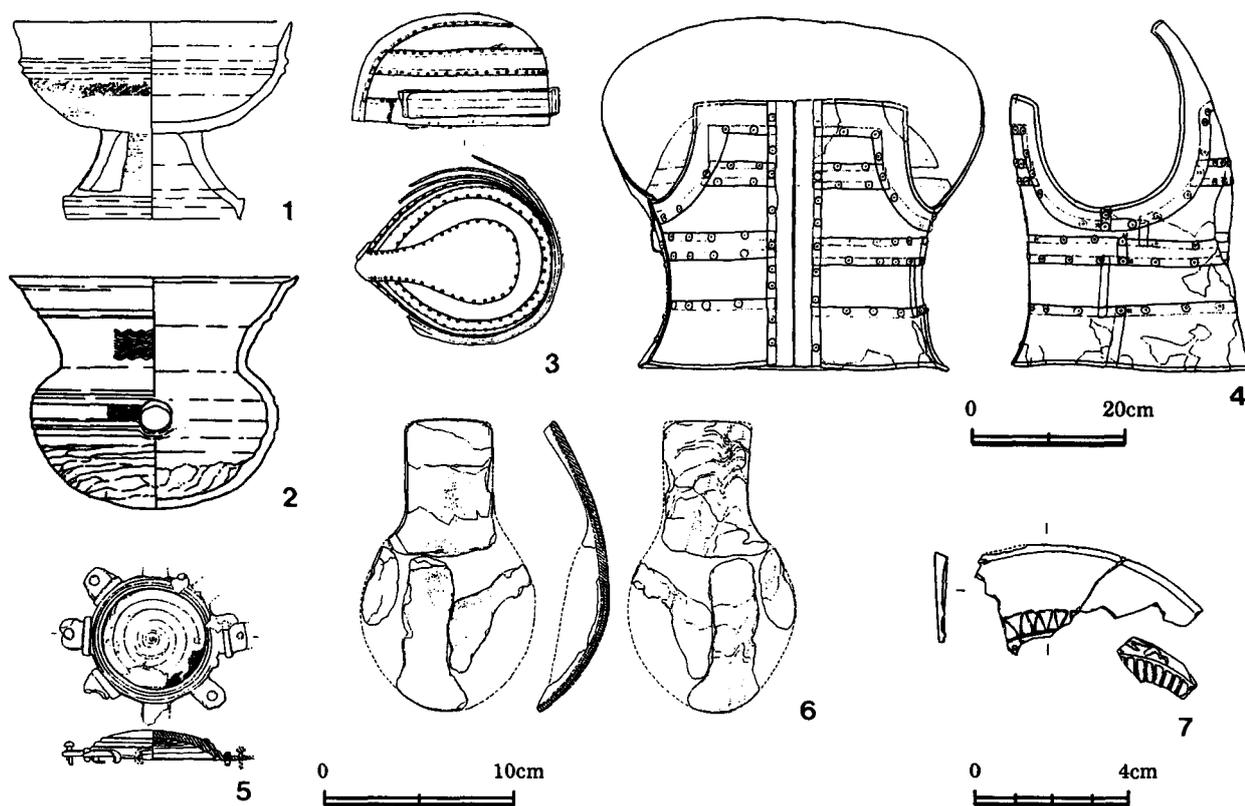


1. 月城路古墳群, 2. 皇南里古墳, 3. 玉田古墳群, 4. 沙道里, 5. 道項里古墳群, 6. 泉洞古墳群, 7. 三東洞墳墓群, 8. 加音丁洞遺跡, 9. 良洞里古墳群, 10. 龍院遺跡, 11. 大成洞古墳群, 12. 府院洞遺跡, 13. 水佳里遺跡, 14. 礼安里古墳群, 15. 福泉洞古墳群, 16. 東萊貝塚

図7 韓国出土倭系遺物の分布 (3世紀後半～5世紀前葉)

現在の出土資料からみる限り、倭人集団の数世代にわたる長期定住を想定するのは困難ではないだろうか。さらに、これら土師器および土師器系土器の分布が南海岸部に限定され、内陸地域にはほとんどみられないという事実も重要である⁽¹⁰⁾ (図7)。したがって、これらは政治的・軍事的要因などによる移住ではなく、むしろ交易などのために往来していた倭人たちの一定期間の生活痕跡と考えるのが妥当ではないだろうか。その目的としては、軍事的な要因よりは、むしろ南部地域における鉄の入手などの交易が想定される。事実、龍院遺跡では小型の鉄錠が出土しており、東萊貝塚の状況から推定すれば、龍院遺跡にも鍛冶遺構が存在したかもしれない⁽¹¹⁾。また、前述した巴形銅器、碧玉製品などもこれらの交易によってもたらされた可能性がある。

この他に慶尚南道昌原市三東洞18号石棺墓出土の仿製内行花文鏡、三東洞2号石棺墓出土の銅鏃 [安春培1984]、慶尚南道金海市礼安里77号墳出土のイモガイ製貝符などの倭製品があるが [安在皓ほか1993]、いずれも南部海岸地域で出土している。この時期の倭系遺物がいずれも韓国の南部地域に集中しており、慶尚道以北で出土していないことは、倭の対外交易の窓口が南部地域に限



1: 鳳溪里20号墳, 2: 伝・宜寧, 3・4: 池山洞32号墳石室, 5: 山清郡丹城面, 6: 池山洞44号墳主石室, 7: 池山洞45号墳1号石室

図8 5世紀中葉～6世紀前半における加耶地域出土の倭系遺物

定されていたことを示している。一方、倭系遺物の系譜をみると、山陰など北部九州以外の地域の遺物も存在することから、日本側では比較的広範囲にわたる交易が行われていたものと推定される。

③……………5世紀中葉～6世紀前半の倭系遺物

この時期の倭系遺物としては、まず須恵器があげられる。韓国出土の須恵器に関しては、すでに酒井清治氏によって集成、および考察が行われている [酒井 1993]。加耶地域出土のものとしては、慶尚南道陝川郡鳳溪里 20 号墳、慶尚北道高靈郡池山洞 1-5 号墳、慶尚南道宜寧郡泉谷里 21 号墳、伝・慶尚南道宜寧出土品、慶尚南道山清郡生草 9 号墳、慶尚南道固城郡松鶴洞 1 号墳などがあげられる。まず、鳳溪里 20 号墳は 250×45 cm の竪穴式石槨墓であり、鉄製武器類・農工具類などとともに、TK 208～TK 23 型式と推定される無蓋高杯 (図 8-1) が出土している [沈奉謹 1986]。松鶴洞 1 号墳 A-1 号竪穴式石槨・B-1 号横穴式石室・A-11 号竪穴式石槨からは、TK 47～MT 15 型式に該当する杯身、杯蓋、甗が出土している [沈奉謹 2001]。生草 9 号墳は詳細が未報告であるが、竪穴式石槨であり、MT 15～TK 10 型式に該当する高杯と蓋杯が出土している [宋永鎮 2002]。なお、この古墳では倭鏡と推定される珠文鏡 1 面が共伴している。伝・慶尚南道宜寧出土の甗 (図 8-2) は TK 23～47 型式に該当するものであろう [酒井 1993]。

加耶地域以外でも忠清北道清州市新鳳洞 90 B-1 号墳，全羅北道扶安郡竹幕洞祭祀遺跡，全羅南道羅州市伏岩里 3 号墳 96 号石室墓などで須恵器が出土している。まず，新鳳洞 90 B-1 号墳は 370 × 180 cm の大型土壙墓であり，鉄製武器類，三角板鋌留短甲，馬具類，鉄製農具，土器類が副葬されていた。ここから TK 208～TK 23 型式に該当すると推定される杯身 4 点と杯蓋 2 点が出土している [李源福ほか 1990]。また，竹幕洞祭祀遺跡では，倭系の祭祀遺物とともに TK 47～MT 15 型式に該当する杯蓋と無蓋高杯が出土している [国立全州博物館 1994，小田 1998]。伏岩里 3 号墳 96 号石室墓は方台形墳丘完成期の主要主体部であり，全長 9 m の横穴式石室墓である。石室内より鉄製武器類，馬具類，装身具類などとともに，TK 47 型式と MT 15 型式に該当する腿が出土している [金洛中 2001，尹根一ほか 2001]。

以上のように，加耶地域出土の須恵器は南部海岸地域だけでなく，高靈，陝川，宜寧など内陸地域でもみられるようになる。さらに全羅南道や忠清北道など加耶地域以外でも出土しており，前時期の倭系遺物に比べると分布域が広がる。ただし，内陸部のものはいずれも古墳出土のものであるという点は重要である。さらに，鳳溪里 20 号墳のように 1 点のみが副葬されている場合もあることから，必ずしも倭人によって直接的にもたらされたものとは限らない。新鳳洞 90 B-1 号墳では複数の須恵器が一括で副葬されているが，すでに申鐘煥氏が指摘しているように，加耶系の遺物が多数含まれていることから，南部の加耶を通じてもたらされた可能性もある [申鐘煥 1996]。新鳳洞古墳群の位置する清州地域は，金海地域から洛東江をさかのぼり，尚州から小白山脈を越えて漢城方面へ至るルート上に近い。3・4 世紀の例ではあるが，忠清南道天安付近に分布の中心がある馬形帯鉤は清州，尚州，善山（亀尾），金海で出土しており，まさに，このルートと分布が重なっている。このルートは古の楽浪・帯方郡へ向かう重要交通路であったことからみても，新鳳洞古墳群の倭系遺物が洛東江下流域の加耶を通じてもたらされた可能性は高い。

次にいわゆる中期型甲冑とされる帯金式甲冑としては，慶尚北道高靈郡池山洞 32 号墳石室（5 世紀後半）出土の横矧板鋌留衝角付冑（図 8-3）と横矧板鋌留短甲（図 8-4） [金鍾徹 1981]，池山洞 I 地区 3 号墳出土の縦矧細板鋌留眉庇付冑 [朴升圭ほか 1998]，釜山市福泉洞 4 号墳（5 世紀後半）出土の三角板革綴短甲 [申敬澈・宋桂鉉 1985]，同・生谷洞加達 4 号墳（5 世紀後半）出土の三角板鋌留短甲 [宋桂鉉・洪漕植 1993]，同・五倫台古墳出土の三角板革綴衝角付冑 [宋桂鉉 1988]，同・蓮山洞 8 号墳（5 世紀後半）出土の長方板革綴短甲と三角板鋌留短甲 [申敬澈 1988]，伝・蓮山洞古墳群出土の三角板鋌留短甲と縦矧細板鋌留眉庇付冑 [沢沢・馬目 1975 b]，慶尚南道金海市三溪洞杜谷 43 号墳出土の三角板革綴短甲と縦矧細板鋌留眉庇付冑 [孫明助ほか 2000]，慶尚南道咸安郡道項里 13 号墳（5 世紀前半）出土の三角板革綴短甲 [崔鍾圭ほか 2000]，同・昌寧郡校洞 3 号墳（5 世紀中葉）出土の三角板横矧板併用鋌留短甲 [沈奉謹ほか 1992]，同・咸陽郡上栢里古墳群出土の三角板鋌留短甲 [金東鎭 1972]，同・陝川郡玉田 28 号墳出土の横矧板鋌留短甲 [趙榮濟ほか 1997]，玉田 68 号墳（5 世紀前半）出土の三角板革綴短甲 [趙榮濟ほか 1995] などがある。これら帯金式甲冑が出土した古墳の時期は 5 世紀代が中心であり，そのなかでもとくに 5 世紀後半代のものが多い。出土地域をみると，やはり南部海岸地域だけでなく，高靈，陝川，昌寧，咸陽など内陸地域からも出土している。また，東南部地域以外でも新鳳洞 90 B-1 号墳から三角板鋌留短甲が出土しており，近年，全羅南道海南郡外島 1 号墳 [殷和秀・崔相宗 2001] と同・長城郡晚舞里古墳からもそれぞれ

帯金式短甲が出土している [朴天秀 2002]。これらのうち短甲と冑がセットで副葬されているものは、池山洞 32 号墳と杜谷 43 号墳のみであり、その他は短甲のみ、あるいは冑のみの副葬であることからみて、防御具のセットとしてはかなり変容しているものと考えられる。また、帯金式甲冑と前述した須恵器やその他倭系遺物の分布はかなり重なる部分が多いことがわかる。これらの点からみて、これら帯金式甲冑は倭からの搬入品である可能性が高いのではないだろうか。ただし、短甲と冑のセットがかなり崩れているものが多いことから、すべてが倭人との交流によって直接的にもたらされたものとは限らず、加耶内部で再分配された可能性も想定する必要がある⁽¹²⁾。

次に倭鏡については、すでに小田富士雄氏によって集成と検討が行なわれているので [小田 1988]、詳しくは触れないが、加耶地域では池山洞 45 号墳 1 号石室出土の仿製鏡片 (図 8-7) [金鍾徹 1979]、慶尚南道晋州市中安洞出土の獣形鏡 [朝鮮総督府 1916]、慶尚南道山清郡生草 9 号墳出土の珠文鏡などが知られている。これらはいずれも 5 世紀後半～6 世紀前半代のものと推定される。ちなみにこれら倭鏡が出土している高霊、晋州ではその他の倭系遺物も出土しており、生草 9 号墳では須恵器が相伴している。加耶地域以外では新羅の慶州地域と全羅南道地域で倭鏡が出土している。

製品ではないが、倭から渡った原材料として南海産の貝があげられる。韓国出土の貝製品については、近年、木下尚子氏によって集成と、これらに対する詳細な検討が加えられている [木下 2001・2002]。そのなかでも韓国出土のイモガイは馬具 (雲珠・辻金具) の素材として、意図的に倭から導入していたものとして注目される。とくに皇南大塚南墳や金鈴塚など新羅の大型積石木槨墳から集中的に出土しており、その形態も規格化されている。したがって、素材としてのイモガイは計画的に倭から新羅へ、とくに新羅上位階層の馬装の材料として導入されていたものと推定される。木下氏によれば、これら琉球列島産のイモガイは、九州の豪族を介して新羅に供給されていたものとされる。

イモガイ製馬具は慶州以外にも釜山市杜邱洞林石 5 号墳、慶尚南道昌寧郡校洞 11 号墳、固城郡松鶴洞 1 号墳 B-1 号横穴式石室、山清郡丹城面 (図 8-5) などで出土しているが、これらは新羅から再分配された可能性が高いのではないかと考えられる。杜邱洞林石 5 号墳は 6 世紀後半の築造と推定され、出土土器も新羅土器が主体を占めていることから、すでに新羅の支配下に入った段階の古墳と推定される [朴志明・宋桂鉉 1990]。また、校洞古墳群の場合も、加耶的要素が残る 5 世紀中葉の校洞 3 号墳段階では、イモガイ製馬具は見られないが、新羅的色彩が濃厚になる 5 世紀後半の校洞 89 号墳の段階からイモガイ製馬具が現れはめる点もこれを裏付けている。松鶴洞 1 号墳 B-1 号横穴式石室では前述したように須恵器などの倭系遺物が出土していることから、倭から直接もたらされた可能性も否定できないが、この古墳からは新羅系の土器も出土しており、新羅から再分配された可能性も考えられる。倭が貝製品の素材を新羅に供給していた背景には、前時期と同様に韓国東南部からの鉄の入手があったものと推定される。これら对新羅交易の窓口については、直接に慶州地域と交渉していた可能性もあるが、すでに武末氏によって指摘されているように、洛東江下流域の旧金官加耶地域を通じて行っていた可能性もある⁽¹³⁾ [武末 1998]。杜邱洞林石 5 号墳の例は素材を慶州地域に供給し、製品となったものが再分配されたことを示しているのではないだろうか。

イモガイ以外にも慶尚北道林堂洞・造永 EI-1 号墳出土のギンタカハマ魚形装飾品 [鄭永和ほか 1994, 木下 2001] や高霊郡池山洞 44 号墳主石室出土のヤコウガイ製容器 (図 8-6) [尹容鎮 1979, 朴

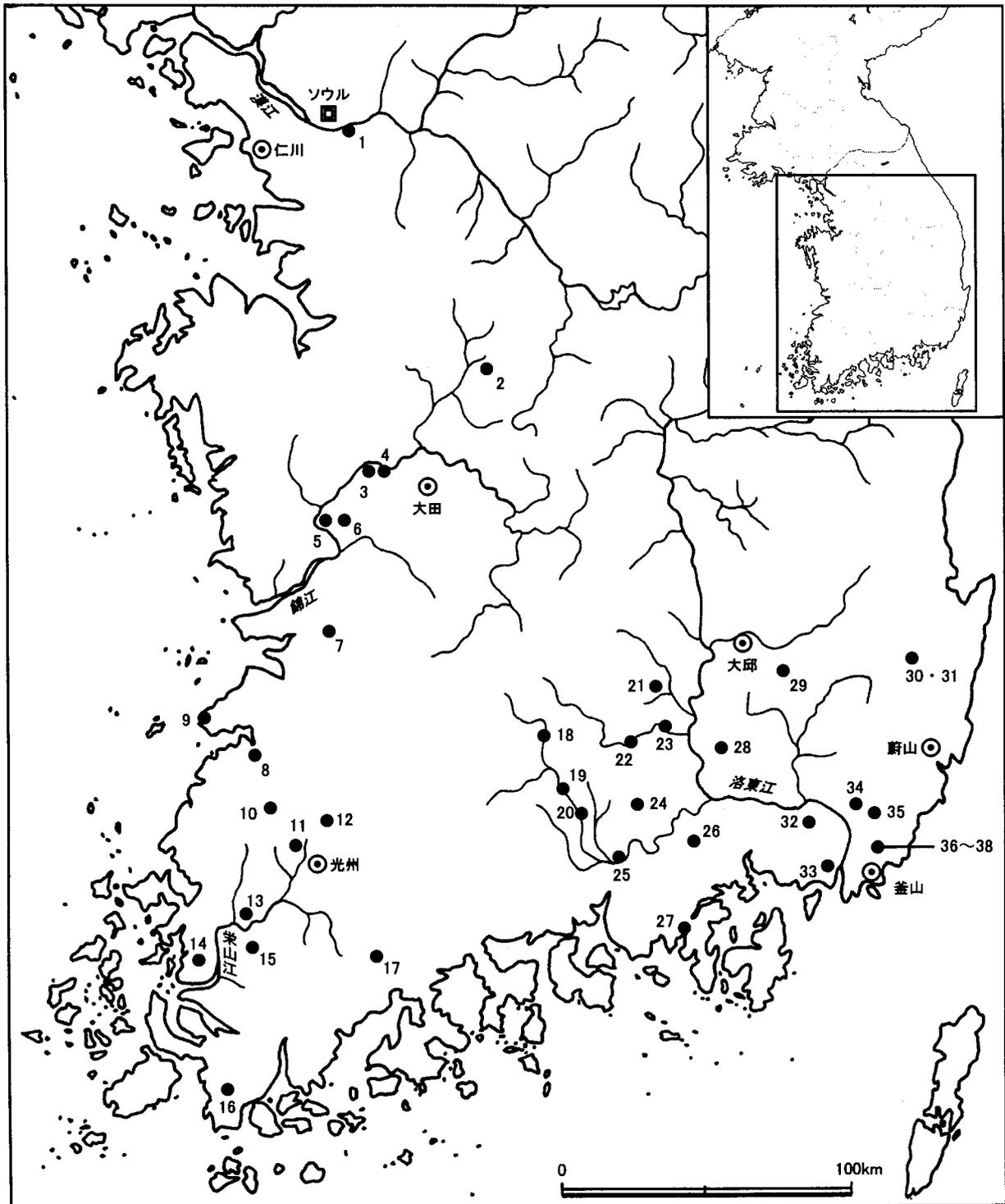
天秀 1998] などの南海産貝製品がある。いずれも 5 世紀後半段階のものであり、素材を九州地方から取り入れたものと推定されている [木下 2001・2002]。

以上のように、5 世紀代には須恵器、帯金式甲冑、倭鏡などの倭製品やイモガイなどの素材が韓国へもたらされたことがわかり、時期的にみると、とくに 5 世紀後半代に集中している。これらの分布をみると、高霊、陝川、昌寧など内陸地域でも倭系遺物が出土するようになり、分布が拡大している (図 9)。とくに大伽耶の中心地である高霊の池山洞古墳群では比較的多くの倭系遺物が出土していることは、5 世紀後半を境として、倭の交渉相手が金官加耶から大伽耶へと変化したことに起因するかもしれない [朴天秀 1998・2002]。しかし、新羅の影響を強く受けた昌寧地域でも直弧文鹿角装鉄剣や三角板横矧板併用鋌留短甲などの倭系遺物が出土しており、必ずしも大伽耶勢力圏ではない地域からも出土している。また、前述した新羅との交易や末伊山 34 号墳出土の直弧文鹿角刀装具、松鶴洞 1 号墳出土の須恵器が示すように、必ずしも大伽耶だけに限定された交渉ではなかったようである。つまり、大伽耶だけでなく、新羅や洛東江下流域、固城地域、柴山江流域などの南部海岸地域とも幅広い交渉を行っていたことがわかる。また、松鶴洞 1 号墳では複数の倭系遺物がセットで出土しており、単体での出土が多い内陸部の様相とは大きく異なっている。さらに松鶴洞 1 号墳では倭系遺物だけでなく、大伽耶・百濟・新羅系遺物が出土しており、広範囲な交渉を行っていたことを示している。これらの点からみて、倭と新羅・大伽耶の交渉においても、固城や金海・釜山など南部海岸地域が重要な役割を担っていたのではないかと推定される。

おわりに

以上のように、おもに加耶地域出土の倭系遺物について、3 世紀後半～5 世紀前葉と 5 世紀中葉～6 世紀前半の二時期に分けて検討した。その結果、まず 3 世紀後半～4 世紀については、大成洞古墳群の倭系遺物が注目され、とくに大型木槨墓である大成洞 13 号墳に複数の倭系遺物が副葬されている点から、倭との交渉を主導していたのは金海の上位階層であり、これらを通じて倭系遺物がセットでもたらされたものと推定した。また、南部地域出土の土師器および土師器系土器は、その様相からみて、3 世紀後葉～5 世紀前葉に倭から渡来した人々が在地の集団とともに一定期間生活していたことを示すものであるが、倭人集団が数世代にわたって長期定住した可能性は低いと考えられる。したがって、その目的は政治的・軍事的な移住などではなく、南部地域の鉄を入手するための比較的短期間の断続的な渡来ではなかったかと推定される。また、倭系遺物の分布が南部海岸地域に集中しており、内陸部ではほとんど出土していないことからみて、当時の対倭交渉の窓口が南部地域に限定されていたものと推定した。

つぎに 5 世紀中葉～6 世紀前半になると、内陸地域でも倭系遺物が出土するようになり、前時期に比べて分布域が拡大する。とくに、大伽耶の中心地である高霊地域では、池山洞古墳群などで倭系遺物が比較的多く出土している。しかし、倭系遺物の分布の拡大が、そのまま倭人の行動範囲の拡大を意味するものではなく、5 世紀後半以後も倭が加耶と直接交渉する地域は、南部海岸地域に集中していた可能性を指摘した。松鶴洞 1 号墳の副葬遺物にみられるように、5 世紀後半になると内陸の大伽耶地域と固城などの南部海岸地域とのネットワークが確立したものと推定される。した



1. 風納土城, 2. 新鳳洞古墳群, 3. 武寧王陵, 4. 艇止山遺跡, 5. 軍守里, 6. 陵山里古墳群, 7. 益山大王墓, 8. 上燈里, 9. 竹幕洞遺跡, 10. 晩舞里古墳, 11. 双岩洞古墳, 12. 齊月里古墳, 13. 伏岩里古墳群, 14. 麥浦里, 15. 大安里古墳群, 16. 造山古墳, 17. 大谷里遺跡, 18. 上栢里古墳群, 19. 生草古墳群, 20. 丹城面, 21. 池山洞古墳群, 22. 鳳溪里古墳群, 23. 玉田古墳群, 24. 泉谷里古墳群, 25. 晋州中安洞, 26. 末伊山古墳群, 27. 松鶴洞古墳群, 28. 校洞古墳群, 29. 林堂洞古墳群, 30. 皇南洞古墳群, 31. 路西洞・路東洞古墳群, 32. 杜谷古墳群, 33. 生谷洞加達古墳群, 34. 梁山夫婦塚, 35. 杜邱洞林石古墳群, 36. 福泉洞古墳群, 37. 五倫台古墳, 38. 蓮山洞古墳群

図9 韓国出土倭系遺物の分布 (5世紀中葉～6世紀前半)

がって、倭系遺物の分布が内陸地域に拡大するのは、これら加耶内部のネットワークの確立に起因する可能性もある。つまり、倭系遺物の拡大はこのような加耶のネットワークを背景にして南部海岸地域から内陸部へ再分配された結果であり、加耶における倭人の活動範囲はかなり限定されていたのではないだろうか。

本稿では加耶地域出土の倭系遺物に焦点を絞ったため、その他の地域についてはあまり触れられなかったが、5世紀後半における全羅南道地域での倭系遺物の増加は注目すべきである。このうち、造山古墳で出土しているゴホウラ製釧は、肥君と筑後を中心とする政治連合とかかわって、韓半島に登場したものとされる〔木下2002〕。栄山江流域には前方後円墳が分布していることからみても、明らかに加耶地域とは異なる交渉が想定される。今後、加耶地域と北部九州地域との動向と合わせて検討すべき課題といえる。

一方、6世紀以後になると百済地域で倭系遺物がみられるようになる。このうち、公州市武寧王陵や扶余陵山里古墳群など百済王陵で出土している高野槇製木棺は、倭と百済の政治的な関係を背景として百済王室に贈られたものであろう。扶安郡竹幕洞遺跡で出土している倭系の祭祀遺物についても、百済と倭を結ぶ航路上の祭祀を示すものである。これら百済地域における様相は加耶地域の場合と大きく異なっており、今後、栄山江流域を含めた南部地域との比較研究も必要である。

補記

脱稿後、木下亘2003「韓半島 出土 須恵器(系)土器에 대하여」『百済研究』第37集を入手することができた。木下氏は韓国出土の須恵器、および須恵器を模倣した須恵器系土器を集成し、これらがTK 23~MT 15型式に集中することを明らかにしている。また、慶尚道では搬入品が多いのに対し、全羅道・忠清道では須恵器系土器が多く出土する点、慶尚道では古墳からの単体出土が多い点、須恵器系土器の分布が前方後円墳の分布と重なる点、樽形甗は須恵器の器形が逆輸入されて作られた点を指摘している。このうち、慶尚道地域では古墳から1点ずつ出土するケースが多いという状況は、他の倭系遺物においても共通するようである。また、本稿の対象外であるが、前方後円墳が分布する栄山江流域は、やはり加耶と異なる状況がみられるようである。

註

(1) ——ただし、ほぼ同じ時期に、慶尚南道勒島遺跡などで弥生土器の搬入品が存在することが、韓国の研究者によって明らかにされはじめていた〔申敬澈1980〕。

(2) ——ただし、大成洞古墳群の発掘調査当初、申敬澈氏は良洞里遺跡の三韓時代の墳墓では北部九州産の製品が出土し、大成洞遺跡の三国時代の墳墓では畿内地域と関連する製品が出土していることから、狗邪国時期(三韓時代)には北部九州と交渉していたものが、金官加耶時期(三国時代)になると、畿内地域へと交渉の対象が変わったものととらえ、これは当時の倭内部の情勢を反映しているという見解を提示していた〔申敬澈1992b〕。

(3) ——柳田氏が大成洞古墳群で出土している巴形銅器などを倭の精神文化に伴う象徴的宝器ととらえることに対しては、申敬澈氏による強い批判がある。申敬澈氏は柳田氏の主張を加耶に対する日本精神の輸出を意味するものであるとした上で、当時の金官加耶にとって倭は交渉対象のひとつに過ぎず、金官加耶の文化的基盤は倭色ではなく、北方色であったとし、石製品や巴形銅器が本来もっていた精神文化的意味は、金官加耶ではすでに喪失していたものととらえている〔申敬澈1992a〕。

(4) ——研究史の部分では触れられなかったが、大成洞遺跡出土の倭系遺物に関しても多くの研究成果がある。まず、大成洞古墳群の報告書では13・18号墳で出土し

た倭系遺物について、大多数が畿内以外の地域に系譜が求められるとして、金官加耶は日本列島の各地と多角的な交流を行っていたものと推定している〔申敬澈・金宰佑 2000b〕。また、小田富士雄氏は倭政権による相互贈答品としての性格が想定されるとし、その背景には4世紀代にはじまる高句麗と倭・百済の抗争があるとす〔小田 1993〕。河村好光氏は鏃形石製品について検討し、これらは畿内の中枢勢力が特別に集め揃えたものであり、矢鏃と盾の組合で日本的な武威の表現として贈られたものとする。ただし、直接的な軍事行動と結びつけることには慎重な立場をとっている〔河村 1995〕。柳本照男氏は筒形銅器を槍の石突、巴形銅器を盾や鞆に装着されたものであるとした上で、これらは古墳時代前期後半～中期初頭に金官加耶へ援軍として派遣された倭の軍団の有力将軍層たちが同盟軍の特定有力集団層に進呈したものであるとし、当時の軍事的な要因を強調している〔柳本 2001〕。

(5) —筒形銅器の製作地については、日本列島説と韓半島説に分かれており、いまだ見解が一致していない。細部では違いもあるが、おおむね倭の製品とする見解としては、山田 1999、柳本 2001 などがあげられ、加耶製品、あるいはその可能性を強く指摘するものとしては、申敬澈 1993、田中 1998、鄭澄元・洪潛植 2000 などがあげられる。また、原久仁子氏は製作地は不明確としながらも、筒形銅器が韓国で出現する背景が十分にあると指摘する。さらに、もし筒形銅器が日本で作られたとしても、その製作においては韓半島からの強い影響が及んだとする〔原 2001〕。

(6) —1993年の調査ではA・F・Jピットが調査され、F・Jピットでは貝層が良好な状態で残存していた。土師器系土器が比較的多く出土したFピットの層位は、表土から1～19層に分けられている。

(7) —福泉洞 57号墳の報告者である李在賢氏は4世紀中葉とするのに対し〔李在賢ほか 1996〕、安在皓氏は4世紀後葉に位置づけている〔安在皓 1993〕。福泉洞 57号墳では外折口縁高杯、炬形器台、鉄矛などにやや古い要素がみられることから、本稿では報告者の見解に従った。

(8) —これまで3世紀代の墳墓から土師器系土器が

出土したという報告はないが、2世紀後半の大型木槨墓から弥生時代後期の倭系遺物が出土していることからみて、今後これらに後続する墳墓から土師器などの倭系遺物が出土する可能性は高い。正式報告書は未刊であるが、これらの時期の墳墓が多数調査されている良洞里墳墓群などで出土している可能性もあるかもしれない。

(9) ————いうまでもないことであるが、土師器や土師器系土器の出土量は、在地の土器に比べてあまりにも少ない。集落遺跡の場合、倭系土器は重要な資料であるため小破片であっても報告されるが、在地土器の出土量は膨大であり、破片のすべてを報告書に掲載することは不可能である。龍院遺跡の場合も同様であり、実際は報告資料の数十倍～数百倍の在地土器が出土している。これからみれば、土師器の出土量は決して安定した単位であるとはいえない。この点に関しては日本側の西新町遺跡などの場合とかなり様相が異なっているという印象をもっている。

(10) ————これまでの土師器や土師器系土器の出土分布をみると、南海岸地域でもとくに洛東江下流域での出土が顕著である。ただし、南海岸地域では3～4世紀代の集落遺跡が調査されていない地域も多く、必ずしも洛東江下流域に集中するとはいきれない。とくに前時期の泗川市靑島遺跡で倭系遺物が出土していることや、固城郡東外洞遺跡出土の鼓形器台は土師器あるいは土師器系土器の可能性が高いことなどからみて、今後、固城・泗川地域で倭系遺物の出土が増加する可能性は十分にあると考えられる。

(11) ————龍院遺跡は上部がかなり削平を受けており、住居跡の残存状況は必ずしも良好ではなかった。また、調査時にはすでに破壊されていたが、調査区の西側にも居住区は続いており、本来はかなり大規模な集落であったものと推定される。

(12) ————三角板鋸留短甲が副葬されていた加達4号墳では、昌寧系の有蓋高杯が出土しており、加達古墳群全体でも多数の昌寧系土器が出土している。内陸部に位置する昌寧地域との密接な交流関係を示す資料といえる。

(13) ————小田富士雄氏は金鈴塚などの新羅王陵で出土している倭鏡についても、加耶を仲介として二次的に搬入された可能性を指摘している。

参考文献

- 穴沢味光・馬目順一 1973 「羅州潘南面古墳群—「梅原考古資料」による谷井濟一氏発掘遺物の研究—」『古代学
研究』70
—— 1975a 「昌寧校洞古墳群—「梅原考古資料」を中心とした谷井濟一氏発掘資料の研究—」『考
古学雑誌』60巻4号
—— 1975b 「南部朝鮮出土の鉄製鋌留甲冑」『朝鮮学報』第76集
—— 1980 「慶州鷄林路14号墓出土の嵌玉金装短剣をめぐる諸問題」『古文化談叢』第7集
- 安在皓 1993 「土師器系軟質土器考」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社
- 安在皓ほか 1993 『金海礼安里古墳群Ⅱ』釜山大学校博物館遺跡調査報告第15集 釜山大学校博物館
- 安春培 1984 「昌原三東洞薨棺墓」釜山女子大学博物館遺跡調査報告第1集 釜山女子大学博物館
- 今西 龍 1920 「慶尚北道善山郡，達城郡，高靈郡，星州郡，金泉郡 慶尚南道咸安郡，昌寧郡調査報告」『大正
六年度古跡調査報告』朝鮮総督府
- 尹根一ほか 2001 『羅州 伏岩里3号墳』国立文化財研究所
- 尹容鎮 1979 「高靈 池山洞44号古墳 発掘調査報告」『大伽倻古墳発掘調査報告書』高靈郡
- 殷和秀・崔相宗 2001 「海南 北日面一帯 地表調査報告」『海南 方山里 長鼓峰古墳 試掘調査報告書』国立
光州博物館学術叢書第38冊 国立光州博物館・海南郡
- 殷和秀ほか 1998 「東萊樂民洞貝塚」国立博物館古跡調査報告第28冊 国立中央博物館
- 梅原末治 1931 『慶州金鈴塚屨塚発掘調査報告』大正十三年度古跡調査報告第一冊 図版 朝鮮総督府
—— 1932 『慶州金鈴塚屨塚発掘調査報告』大正十三年度古跡調査報告第一冊 本文 朝鮮総督府
—— 1938 「扶余陵山里東古墳群の調査」『昭和十二年度古跡調査報告』朝鮮古跡研究会
—— 1947 『朝鮮古代の墓制』座右宝刊行会
- 大竹弘之 1982 「金海府院洞遺跡出土の二，三の遺物」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ 同志社
大学考古学シリーズ刊行会
- 小川敬吉 1927 「梁山夫婦塚と其遺物」古跡調査特別報告第五冊 朝鮮総督府
- 小田富士雄 1988 「韓国古墳出土の倭鏡」『考古学叢考』上巻 吉川弘文館
—— 1993 「古墳文化期における日韓交渉—倭と百濟・伽耶・新羅—」『伽耶と古代東アジア』新人物往来
社
—— 1998 「韓国竹幕洞祭祀遺跡と古代祭祀—とくに倭系祭祀遺物について—」『網干善教先生古稀記念
考古学論集』網干善教先生古稀記念会
- 河村好光 1995 「海を渡った鍔形碧玉製品」『考古学研究会40周年記念論集 展望考古学』考古学研究会
- 韓炳三・李健茂 1976 「朝島貝塚」国立博物館古跡調査報告第9冊 国立中央博物館
- 木下尚子 2001 「古代朝鮮・琉球交流試論—朝鮮半島における紀元1世紀から7世紀の大型巻貝使用製品の考古学
的検討—」『青丘学術論集』第18集
—— 2002 「韓半島の琉球列島産貝製品—1~7世紀を対象に—」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
- 金元龍 1961 「扶余軍守里出土滑石製母子曲玉」『考古美術』2-10
- 金鍾徹 1979 「高靈池山洞第45号 古墳発掘調査報告」『大伽倻古墳発掘調査報告書』高靈郡
—— 1981 『高靈池山洞古墳群—32~35号墳・周辺石槨墓—』啓明大学校博物館遺跡調査報告第1集 啓明大
学校博物館
- 金廷鶴 1972 『韓国の考古学』河出書房
- 金廷鶴・鄭澄元 1979 「釜山華明洞古墳群」釜山大学校博物館遺跡調査報告第2集 釜山大学校博物館
- 金廷鶴ほか 1980 「味都王陵 第七地区 古墳群 発掘調査 報告」『慶州地区 古墳発掘調査報告書』第二集
文化財管理局慶州史跡管理事務所
- 金東鎭 1972 『咸陽上栢里古墳群発掘調査報告』東亜大学校博物館
- 金洛中 2001 「五~六世紀の榮山江流域における古墳の性格—羅州新村里九号墳・伏岩里三号墳を中心に—」『朝
鮮学報』第179集
- 김형섭・김수경 1997 「宜寧泉谷里古墳群Ⅰ」嶺南埋蔵文化財研究院学術調査報告第9冊 嶺南埋蔵文化財研究院。
宜寧郡
- 慶州文化財研究所 1994 「皇南大塚(南墳)発掘調査報告書」文化財管理局文化財研究所
- 権五栄 2002 「공남토성 출토 외래유물에 대한 검토」『百濟研究』第36集
- 洪潜植 1997 「釜山の 三韓時代 遺跡과 遺物Ⅰ—東萊貝塚—」釜山広域市立博物館福泉分館研究叢書第2冊
釜山広域市立博物館福泉分館

- 湖巖美術館 1997 『湖巖美術館所蔵 金東鉉翁蒐集文化財』 三星文化財団
- 国立金海博物館 1999 『국립김해박물관』 通川文化社
- 国立慶州博物館 1987 『菊隱 李養璿 蒐集文化財』 通川文化社
- 国立慶州博物館・慶北大学校博物館 1990 『慶州市 月城路 古墳群』 国立慶州博物館・慶北大学校博物館・慶州市
- 国立全州博物館 1994 『扶安 竹幕洞 祭祀遺跡』 国立全州博物館學術調査報告第1集 国立全州博物館
- 後藤守一 1940 「上古時代の冑」『刀と劍』2巻7号
- 小林行雄 1982 「古墳時代の短甲の源流」『日・韓古代文化の流れ』 帝塚山考古学研究所
- 崔鍾圭 1982 「陶質土器 成立前夜斗 展開」『韓國考古學報』12 (後藤直・訳 1983 「陶質土器の成立前夜とその展開」『古文化談叢』第12集)
- 崔鍾圭・禹枝南 1992 「咸安郡 郡北面 사도리出土品 紹介」『博物館研究論集』1 釜山直轄市立博物館
- 崔鍾圭ほか 2000 「道項里・末山里 遺跡」 慶南考古学研究所
- 崔秉鉉 1992 『新羅古墳研究』 一志社
- 崔夢龍 1976 「潭陽齊月里百濟古墳斗 그 出土遺物」『文化財』第10号
- 早乙女雅博・早川泰弘 1997 「日韓硬玉製勾玉の自然科学的分析」『朝鮮學報』第162集
- 酒井清治 1993 「韓國出土の須恵器類似品」『古文化談叢』第30集
- 車勇杰ほか 1990 「清州新鳳洞A地区土壙墓群發掘調査報告書」『清州 新鳳洞 百濟古墳群 發掘調査報告書—1990年度調査—』調査報告第24冊 忠北大学校博物館
- 徐聲勳・成洛俊 1984 『海南 月松里 造山古墳』 光州博物館學術叢書第4集 国立光州博物館・百濟文化開發研究院
- 徐始男ほか 1998 『金海鳳凰台遺跡』 釜山大学校博物館研究叢書第23集 釜山大学校博物館
- 申敬澈 1980 「熊川文化期 紀元前上限説 再考」『釜山史學』第4集
- 1983 「伽耶地域における四世紀代の陶質土器と墓制—金海礼安里遺跡の發掘資料を中心として—」『古代を考える 古代伽耶の検討』34
- 1988 「釜山蓮山洞8号墳發掘調査概報」『釜山直轄市立博物館年報』第10集
- 1992a 「最近伽耶遺跡の出土遺物の解釈をめぐる若干の問題点」『東アジアの古代文化』72号
- 1992b 「四・五世紀代の金官伽耶の実像」『巨大古墳と伽耶文化』角川選書235 角川書店
- 1993 「伽耶成立前後の諸問題—最近の發掘調査成果から—」『伽耶と古代東アジア』 新人物往来社
- 2000 「嶺南의 古代甲冑」『鶴山 金廷鶴博士 頌壽紀念論叢 韓國 古代史와 考古學』 学研文化社
- 申敬澈 (大竹弘之・訳) 2001 「嶺南出土の土器系土器」『3・4世紀日韓土器の諸問題』 釜山考古学研究会
- 申敬澈ほか 1985 『金海礼安里古墳群Ⅰ』 釜山大学校博物館遺跡調査報告第8集 釜山大学校博物館
- 申敬澈・金宰佑 2000a 『金海大成洞古墳群Ⅰ』 慶星大学校博物館研究叢書第4集
- 2000b 『金海大成洞古墳群Ⅱ』 慶星大学校博物館研究叢書第7集
- 申敬澈・宋桂鉉 1985 「東萊 福泉洞4号墳斗 副葬遺物」『伽耶通信』第11・12合集号
- 申鐘煥 1996 「清州 新鳳洞出土遺物の 外来的 要素에 관한 一考—90 B-1号墳을 中心으로—」『嶺南考古學』18 (吉井秀夫・訳「清州新鳳洞古墳群出土遺物の外来的要素に関する一考察—90 B-1号墳を中心として—」『古文化談叢』第44集, 2000年)
- 秦弘燮 1969 「皇吾里第三十三号墳」『慶州皇吾里第一・三三号, 皇南里第一五一号古墳發掘調査報告』 文化財管理局
- 成洛俊ほか 1992 『특별전 한국의 웅관묘』 国立光州博物館
- 全玉年ほか 1989 『東萊福泉洞古墳群 第2次 調査概報』 釜山大学校博物館
- 宋永鎮 2002 「산청 생초고분군 발굴조사」『제26회 한국고고학전국대회 해양 교류의 고고학』 韓國考古学会
- 宋桂鉉 1988 『三国時代 鉄製甲冑의 研究—嶺南地域 出土品을 中心으로—』 慶北大学校文学碩士學位論文 慶北大学校大学院
- 1993 「伽耶出土の甲冑」『伽耶と古代東アジア』 新人物往来社
- 宋桂鉉・洪漕植 1993 『生谷洞加達古墳群Ⅰ』 釜山直轄市立博物館遺跡調査報告書第8冊 釜山直轄市立博物館
- 宋桂鉉ほか 1993 『東萊福泉洞53号墳』 釜山直轄市立博物館遺跡調査報告書第6冊 釜山直轄市立博物館
- 1995 「東萊 福泉洞古墳群 第5次 發掘調査 概報」『博物館研究論集』3 釜山広域市立博物館
- 孫明助ほか 2000 『고고학이 찾은 선사와 가야』 国立金海博物館・釜山広域市立博物館福泉分館
- 武末純一 1988 「朝鮮半島の布留式系甕」『永井昌文教授退官記念論文集 日本民族・文化の生成』1 六興出版(武)

- 末純一 1991『土器からみた日韓交渉』学生社所収)
- 1989「小形丸底埴の軌跡—考古学から見た日朝交流の一断面—」『古文化談叢』第20集(下)(武末純一 1991『土器からみた日韓交渉』学生社所収)
- 1993「朝鮮半島と日本の土器」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社
- 1998「土器에서 본 加耶와 古代日本」『加耶史論集』1 金海市
- 田中晋作 1998「筒形銅器について」『網干善教先生古稀記念考古学論集』網干善教先生古稀記念会
- 趙榮濟ほか 1995「陝川玉田古墳群V—M10・M11・M18号墳—」慶尚大学校博物館調査報告第13集 慶尚大学校博物館
- 1997「陝川玉田古墳群VI—23・28号墳—」慶尚大学校博物館研究叢書第16集 慶尚大学校博物館
- 朝鮮総督府 1916『朝鮮古跡図譜三』朝鮮総督府
- 沈奉謹 1981「金海府院洞遺跡」古跡調査報告書第5冊 東亜大学校博物館
- 1986「陝川鳳溪里古墳群」古跡調査報告書第13冊 東亜大学校博物館
- 2001「固城 松鶴洞古墳群」『제3회 국제학술대회 발표요지 松鶴洞古墳群—古自國(小加耶)의 타임캡슐—』東亜大学校博物館
- 沈奉謹・李東注 1996「鎮海龍院遺跡(第1・2次合集)」古跡調査報告書第24冊 東亜大学校博物館
- 沈奉謹ほか 1992「昌寧校洞古墳群」古跡調査報告書第21冊 東亜大学校博物館
- 鄭永和ほか 1994「慶山 林堂地域 古墳群II」學術調査報告第19冊 嶺南大学校博物館・韓国土地開發公社慶北支社
- 鄭澄元・洪潛植 2000「筒形銅器研究」『福岡大学総合研究所報』第240号
- 鄭澄元・申敬澈 1984「古代韓日甲冑断想」『尹武炳博士回甲紀念論叢』通川文化社(定森秀夫・訳 1986「古代韓日甲冑断想」『古代文化』第38卷第1号)
- 東亜大学校博物館 2001「現場説明会資料 固城 松鶴洞古墳群 発掘調査 概要(2次)」東亜大学校博物館
- 東義大学校博物館 1994「金海良洞里古墳群発掘調査」指導委員会資料
- 1995「金海良洞里古墳群発掘調査—金海良洞里山6-2番地와 山4番地の 境界地点에 대한 緊急調査—」指導委員会資料
- 1996「金海良洞里古墳群発掘調査—第4次発掘調査現場説明会資料—」指導委員会資料
- 東京国立博物館 1982「寄贈 小倉コレクション目録」東京国立博物館
- 董眞淑ほか 2002「고대아시아 文물교류」釜山広域市立福泉博物館
- 西谷 正 1977「朝鮮考古学の現段階」『朝鮮史研究会論文集』第14集
- 1983「加耶地域と北部九州」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
- 浜田耕作・梅原末治 1924「慶州金冠塚と其遺宝」古跡調査特別報告第三冊 朝鮮総督府
- 原久仁子 2001「한・일 출토 筒形銅器에 대한 비교 검토」『三国時代研究1』清溪古代学研究会學術叢書1 学研文化社
- 藤田和尊 1985「日韓出土の短甲について—福泉洞10号墳・池山洞32号墳出土例に関連して—」『末永先生米寿記念献呈論文集 坤』奈良明新社
- 文化財管理局 1973「武寧王陵発掘調査報告書」文化財管理局
- 1975「天馬塚」文化財管理局
- 朴敬源 1962「母子曲玉의 一例」『考古美術』第3卷第11号
- 朴志明・宋桂鉉 1990「釜山 杜邱洞 林石遺跡」釜山直轄市立博物館調査報告書第4冊 釜山直轄市立博物館
- 朴升圭ほか 1998「高靈池山洞30号墳」嶺南埋蔵文化財研究院學術調査報告第13冊 嶺南埋蔵文化財研究院・高靈郡
- 朴相珍・姜愛慶 1991「百濟 武寧王陵 出土 棺材의 樹種」『松菊里IV』国立博物館古跡調査報告第23冊 国立中央博物館
- 朴天秀 1997「三国時代 東萊・釜山地域 集團의 对倭交渉」『제1회 부산광역시립북천박물관 학술발표대회 가야사 복원을 위한 북천동고분군 제조명』釜山広域市立福泉博物館
- 1998「四, 五世紀における韓日交渉の考古学的再検討 考古学から見た古代の韓・日交渉」『青丘學術論集』第12集
- 2002「考古資料를 통해 본 古代 韓半島와 日本列島의 相互作用」『韓國古代史研究』27
- 朴日薫 1969「皇南里第一一五号墳」『慶州皇吾里第一・三三号, 皇南里第一一五号古墳発掘調査報告』文化財管理局
- 谷井濟一 1920「京畿道広州・高陽・楊州・忠清南道天安・公州・扶余・青陽・論山・全羅北道益山及全羅南道羅

-
- 州十郡古跡調査略報告』『大正六年度古跡調査報告』朝鮮総督府
- 柳田康雄 1989 「朝鮮半島における日本系遺物」『九州における古墳文化と朝鮮半島』学生社
 —— 1990 「倭と伽耶の文物交流」『東アジアの古代文化』62号
 —— 1992a 「倭人と伽耶」『九州歴史大学講座』№5
 —— 1992b 「朝鮮半島の倭系遺物の解釈」『東アジアの古代文化』73号
- 柳本照男 2001 「金海大成洞古墳群出土の倭系遺物について」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会
- 李漢祥ほか 1999 『艇止山』国立公州博物館学術調査叢書第7冊 国立公州博物館・現代建設
- 李賢珠 1997 『東萊福泉洞 93・95号墳』釜山広域市立博物館福泉分館研究叢書第3冊 釜山広域市立博物館福泉分館
- 李源福ほか 1990 「청주신봉동 B 지구널무덤발굴조사보고」『清州 新鳳洞 百濟古墳群 発掘調査報告書—1990年度調査—』調査報告第24冊 忠北大学校博物館
- 李在賢ほか 1996 『東萊福泉洞古墳群Ⅲ』釜山大学校博物館研究叢書第19集 釜山大学校博物館
- 李盛周・金亨坤 1990 『馬山 県洞遺跡』昌原大学校博物館学術調査報告第3冊 昌原大学校博物館
- 李柱憲ほか 1994 「昌原 加音丁洞貝塚 発掘調査報告」『昌原加音丁洞遺跡』学術調査報告第2集 昌原文化財研究所
- 李命憲 1990 「大谷里한실住居址」『住岩 滄水没地域文化遺跡発掘調査報告書Ⅶ』全南大学校博物館・全羅南道
- 林孝澤・郭東哲 2000 『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7 東義大学校博物館
- 林永珍ほか 1994 『光州 月桂洞長鼓墳・双岩洞古墳』全南大学校博物館・光州直轄市

(埼玉大学教養学部)

(2003年4月14日受理, 2003年7月18日審査終了)

付表 韓国の倭関係遺物 (3世紀後半～6世紀)

例言

*この表は倭との関係が指摘されている遺物を集成したものであり、必ずしもすべてが倭の製品であるとは限らない。

*この表には出土地が明らかになっている遺物のみを掲載し、出土地不明のものは除外した。

*この表には倭からの搬入品、あるいはその可能性が指摘されるものを掲載し、土師器系軟質土器など、倭製品を模倣して韓国で製作された遺物は除外した。

*貝塚や包含層から出土している場合の共伴遺物は省略した。

遺跡名	倭関係遺物	遺構種類	共伴遺物	遺構時期	参考文献
ソウル市 風納土城キョンダン 地区上層	埴輪片 1	包含層		5世紀	権五栄 2002
忠北清州市 新鳳洞 90A-32号墳	須恵器杯身 1	土壙墓	瓦質平底壺	5世紀後半	車勇杰ほか 1990
忠北清州市 新鳳洞 90B-1号墳	須恵器 (杯身 4, 杯蓋 2) 土師器直口壺 1 三角板鋳留短甲 1	木棺墓	鉄刀, 鉄鏃, 短甲, 轡, 鏡, 鉄刀 子, 鉄鎌, 鉄斧, 金銅装飾, 硬質 土器 (壺, 三足鉢, 蓋杯, 高杯, 甗), 軟質土器 (鉢)	5世紀後半	李源福ほか 1990 申鐘煥 1996
忠南公州市 武寧王陵	高野槨製木棺	塚室墓	環頭大刀, 鉄矛, 鉄刀子, 棺釘, 銅鏡, 冠飾, 玉類, 頸飾, 釧, 耳 飾, 笄, 帯金具, 腰佩, 飾履, 飾 金具, 銅鏡, 銅皿, 銅鬘斗, 銅匙, 銅箸, 銀盞, 五銖銭, 青磁, 白磁, 鎮墓獸, 買地券	6世紀前葉	文化財管理局 1973 朴相珍・姜愛 慶 1991
忠南公州市 艇止山遺跡	須恵器 (高杯 2, 蓋 1, 甗 1)				李漢祥ほか 1999
忠南扶余郡 扶余邑軍守里	滑石製子持勾玉 1	不明	不明	5世紀?	金元龍 1961
忠南扶余郡 陵山里古墳群	高野槨製木棺	横穴式石室	棺金具, 金銅冠金具, 飾鋳など	6世紀後半 ～7世紀前半	朝鮮総督府 1916 谷井 1920 梅原 1938
忠南扶余郡 陵山里東古墳群	高野槨製木棺	横穴式石室	棺釘, 飾鋳, 座金具, 玉類, 金歩 搖など	6世紀後半 ～7世紀前半	梅原 1938
全北益山郡 益山大王墓	高野槨製木棺	横穴式石室	甗	7世紀前半	谷井 1920 梅原 1938
全北高敞郡 上嶺里	赤褐色軟質埴 1	不明	不明	不明	董眞淑ほか 2002
全北扶安郡 竹幕洞遺跡	須恵器 (蓋 2, 無蓋高 杯 1, 提瓶 1) 石製模造品 (有孔円盤 141, 劍形品 34, 鏡 2, 勾玉 7, 刀子 5, 短甲 1, 斧 1, 鎌 1, 鐸 2)	祭祀遺跡		5世紀後半 ～6世紀	国立全州博物 館 1994
光州市 双岩洞古墳	珠文鏡 1	横穴式石室 ?	大刀, 挂甲, 馬具, 棺釘, 硬質土 器 (器台, 長頸壺, 短頸壺, 甗, 高杯, 蓋杯)	5世紀後葉 ～6世紀前葉	林永珍ほか 1994
全南順天市 大谷里 A-1号住居 跡	須恵器杯身 1	住居跡	土器	5世紀後半	李命憲 1990
全南順天市 大谷里 A地区表採	須恵器杯蓋 1			5世紀後半	李命憲 1990

全南順天市 大谷里C地区表採	須恵器杯身 1			5世紀後半	李命熹 1990
全南羅州市 大安里9号墳庚棺	直弧文鹿角装鉄刀子 1	甕棺墓	大刀, 銅劔, ガラス勾玉, 硬玉勾玉, ガラス管玉, ガラス白玉, 金環	5世紀後半	穴沢・馬目 1973
全南羅州市 伏岩里1号墳 周溝東区	須恵器甕 1	横穴式石室	石枕, 有蓋小壺, 小瓶, 大壺, 壺, 大甕, 甌, 緑釉有台杯, 蓋杯, 高杯, 盃, 甕, 鉢, 紡錘車	6世紀前半	林水珍ほか 1999
全南羅州市 伏岩里3号墳 96号石室墓	須恵器甕 2	横穴式石室 (甕棺)	環頭刀, 鉄大刀, 鉄矛, 鉄鏃, 馬具類, 鉄刀子, 鉄鉗, 金銅飾履, 棺釘, 蓋杯, 高杯, 壺, 瓶, 長頸壺, 短頸壺	5世紀後半 ~6世紀前半	金洛中 2001 尹根一ほか 2001
全南潭陽郡 齊月里古墳	六獣鏡 1 珠文鏡 1	冢石墓	鉄刀, 鉄槍, 轡, 鎧, 瑪瑙勾玉, ガラス小玉, 金銅製指輪, 平底短頸壺, 蓋杯	5世紀末 ~6世紀前半	崔夢龍 1976
全南海南郡月松里 造山古墳	珠文鏡 1 ゴホウラ貝劔 1	横穴式石室	環頭大刀, 鉄矛, 鉄石突, 鉄鏃, f字形鏡板付轡, 剣菱形杏葉, 鎧, 銅鈴, 鉄斧, U字形鋤先, 鏃, 碧玉製管玉, ガラス小玉, ガラス切小玉, 勾玉, 短頸壺, 長頸壺, 台付短頸壺, 甕, 広口小壺, 高杯, 蓋杯, 貝殻片	5世紀後葉	徐聲勳・成洛俊 1984
全南海南郡 外島1号墳	三角板革綴短甲 1	箱式石棺	鉄刀, 鉄矛, 鉄鏃, 鉄斧	5世紀?	殷和秀・崔相宗 2001
全南務安郡 三郷面麥浦里	須恵器甕 1	不明	不明	5世紀後半	酒井 1993
全南長城郡 晩舞里古墳	横矧板鋌留短甲 1	未報告	未報告	5世紀?	朴天秀 2002
全南梁山江流域	須恵器甕 1	不明	不明	5世紀後半	成洛俊ほか 1992 酒井 1993
慶北慶州市 皇南大塚(南墳) (主塚)	イモガイ飾金具 7 イモガイ金銅円頭鋌 38	積石木槨墓	仿製方格規矩鏡, 環頭大刀, 鉄矛, 鉄鏃, 鉄刀子, 脛甲, 馬具類, 鏃, 冠帽類, 玉類, 耳飾, 指輪, 鈔帶, 腰佩, 飾履, 金属容器, ガラス容器, 漆器, 硬質土器(高杯, 蓋杯, 広口壺, 長頸壺, 台付短頸壺, 把手付小壺), 軟質土器(有蓋壺, 有蓋小壺)	5世紀中葉	慶州文化財研究所 1994
慶北慶州市 金鈴塚	珠文鏡 1 イモガイ辻金具 7 イモガイ雲珠 1	積石木槨墓	環頭大刀, 鉄鏃, 鉄矛, 鉄石突, 鉄鋌, 鉄刀子, 針, 有刺利器, 馬具類, 土製紡錘車, 冠帽, 玉類, 耳飾, 劔, 帶金具, 指輪, 飾履, 櫛, 鉄鏡, 青銅盒, 金銅盒, 金銅皿, 漆器(皿, 鉢, 盒, 高杯), ガラス椀, 硬質土器(蓋杯, 高杯, 把手付盃, 短頸壺, 長頸壺, 注口壺, 騎馬人物形容器, 船形容器), 軟質土器(小壺)	6世紀前半	梅原 1931・1932

慶北慶州市 金冠塚	イモガイ飾金具 6	積石木槨墓	環頭大刀, 鉄刀, 鉄矛, 鉄鏃, 挂甲, 馬具類 (轡, 鞍, 鎧, 杏葉, 馬鐸, 蛇行状鉄器), 鉄刀子, 鉄斧, 冠帽, 玉類, 釧, 指輪, 耳飾, 飾履, 鈿帶, 腰佩, 金属容器 (釜, 甕, 盒, 高杯, 四耳壺, 刁斗, 角形尊, 鏝斗), 漆器, ガラス容器, 硬質土器 (長頸壺, 短頸壺, 台付把手付盃, 蓋杯, 有蓋高杯, 横瓶), 軟質有蓋盃	5世紀後半	浜田・梅原 1924
慶北慶州市 天馬塚	イモガイ辻金具 6 イモガイ雲珠 4	積石木槨墓	環頭大刀, 鉄刀, 鉄矛, 鉄鏃, 馬具類 (轡, 鞍, 障泥, 鞍褥, 鎧, 杏葉, 馬鐸,), 鉄斧, 刀子, 鉄鏃, 鉄鋌, 鏝, 釘, 冠帽, 耳飾, 釧, 指輪, 玉類, 鈿帶, 腰佩, 飾履, 金属容器 (盒, 高杯, 鼎, 鏝斗, 熨斗, 釜), ガラス杯, 漆器, 硬質土器 (長頸壺, 短頸壺, 高杯, 蓋杯, 把手付小壺, 横瓶), 軟質小盒	6世紀前半	文化財管理局 1975
慶北慶州市 皇吾里 33号墳 (西槨)	イモガイ辻金具 4 イモガイ雲珠 3	積石木槨墓	鉄刀, 鉄鏃, 馬具類 (轡, 杏葉), 鉄斧, 鉄刀子, 鉄鏃, 鉄鋌, 有刺利器, 金属容器 (釜, 壺), 耳飾, 玉類, 釧, 硬質土器 (長頸壺, 三耳壺, 高杯, 蓋杯), 軟質壺	6世紀前半	秦弘燮 1969
慶北慶州市 皇南里 151号墳 (積石槨)	イモガイ辻金具 5	積石木槨墓 ?	鉄刀, 馬具, 耳飾, 硬質土器 (高杯, 短頸壺, 長頸壺)	6世紀前半	朴日薫 1969
慶北慶州市 皇南里古墳	振文鏡 1	積石木槨墓 ?	不明	4世紀末 ~5世紀前半	梅原 1932
慶北慶州市 味都王陵第7地区4 号墳	イモガイ辻金具 4	竪穴式石槨墓	馬具類 (轡, 杏葉), 硬質土器 (高杯, 短頸壺, 有台長頸壺, 長胴甕), 軟質土器 (把手付有蓋盃, 有蓋盃, 甌)	6世紀前半?	金廷鶴ほか 1980
慶北慶州市 鶏林路 14号墳	イモガイ辻金具 1	竪穴式石槨墓	嵌玉金装短劍, 環頭大刀, 馬具類 (鞍, 鎧, 杏葉), 銅盒, 勾玉, 耳飾, 土器類	6世紀	穴沢・馬目 1980
慶北慶州市 月城路7-29号墳	緑色凝灰岩製石釧 1	木槨墓?	鉄大刀, 鉄矛, 鉄鏃, 短甲片, 小札, 鑄造鉄斧, 鉄鋌, 鏝, 水晶勾玉, 管玉, 瑪瑙切小玉, ガラス小玉, 硬質土器 (短頸壺, 台付壺, 大壺, 炉形土器)	4世紀後半	国立慶州博物館・慶北大学 校博物館 1990
慶北慶州市 月城路7-31号墳	土師器? (小型甕, 小 型器台, 高杯)	木槨墓?	硬質土器 (大壺, 有蓋大壺, コップ形土器), 瓦質土器 (コップ形土器), 軟質土器 (小型台付甕), 土製漁網錘	4世紀前半	国立慶州博物館・慶北大学 校博物館 1990
慶北慶山市 林堂洞・造永 EI-1 号墳 (主槨封土)	ギンタカハマ魚形裝飾 品 1	木槨墓	環頭大刀, 鉄刀, 鉄矛, 鉄鏃, 盛矢具, 鉄斧, 鉄刀子, 有刺利器, 金銅冠飾, 金耳飾, 頸飾, 銀鈿帶, 高杯, 長頸壺, 台付盃, 蓋杯, 短頸壺, 筒形器台, 把杯, 軟質鉢, 長卵形甕	5世紀後半	鄭永和ほか 1994 木下 2001
伝・慶北慶山市 林堂洞	珠文鏡 1	不明	不明	5世紀	国立慶州博物館 1987

慶北高靈郡 池山洞 32 号墳石室	横矧板鋌留短甲 1 横矧板鋌留衝角付冑 1	豎穴式石槨墓	金銅冠, 鉄刀, 鉄矛, 鉄鎌, 豎矧細板革綴冑, 頸甲, 肩甲, 馬具類(轡, 鐙, 銅鈴), 鉄刀子, 鋤形鉄器, 鉄釘, 鏝, 硬質土器(有蓋長頸壺, 鉢形器台, 有蓋短頸壺, 有蓋高杯, 盒子, 有台把手付壺, 蓋杯), 軟質蓋	5 世紀後半	金鍾徹 1981
慶北高靈郡 池山洞 45 号墳 1 号石室	仿製鏡片 1	豎穴式石槨墓	三葉文環頭大刀, 鉄矛, 鉄鎌, 挂甲, 馬具類(鞍, 鐙, 轡, 杏葉), 鉄鎌, 鉄刀子, 鉄釘, 鏝, 金銅冠裝飾, 耳飾, 瑪瑙切小玉, 瑪瑙小玉, 金銅空玉, 土製紡錘車, 織物片, 硬質土器(有蓋高杯, 有蓋中頸壺, 有蓋短頸壺, 有台把手付壺, 器台)	6 世紀前半	金鍾徹 1979
慶北高靈郡 池山洞 44 号墳主石室	ヤコウガイ 容器 1	豎穴式石槨墓	鉄刀, 鉄鎌, 鉄矛, 馬具類(轡, 鐙, 鞍, 杏葉), 鍛造鉄斧, 鉄刀子, 釘, 鏝, 腰佩砥石, 青銅盒, 天河石管玉, ガラス小玉, 琥珀玉, 勾玉, 硬質土器(有台把手付杯, 蓋杯, 把手付壺, 高杯, 小壺, 長頸壺, 甗)	5 世紀後半	尹容鎮 1979 朴天秀 1998
慶北高靈郡 池山洞 I 地区 3 号墳	縦矧細板鋌留眉庇付冑 1	豎穴式石槨墓	未報告	5 世紀	朴升圭ほか 1998
慶北高靈郡 池山洞 1-5 号墳	須恵器甗 1	未報告	未報告	5 世紀後半	朴天秀 2002
釜山市 福泉洞 4 号墳	三角板革綴短甲 1	豎穴式石槨墓	鉄劍, 鉄刀, 鉄矛, 鉄鎌, 馬具類(鞍, 雲珠), 鉄鑿, 鉄斧, 鉄刀子, 鉄針, 鏝, 有刺利器, 鉄鋌, 硬質土器(高杯, 有蓋盃, 筒形器台), 砥石	5 世紀後半	申敬澈・宋桂鉉 1985
釜山市 福泉洞 38 号墳 (主槨)	筒形銅器 2 瑪瑙製鐵形石製品 1	木槨墓	環頭大刀, 大刀, 鉄劍, 鉄矛, 鉄鎌, 轡, 冑, 短甲, 小札, 鉄斧, 鉄鎌, 鉄刀子, 有刺利器, 鉄鋌, 鏝, 瓦質短頸壺, 炉形土器, 軟質盃	4 世紀中葉	宋桂鉉ほか 1995 朴天秀 1997
釜山市 福泉洞 53 号墳 (主槨)	黒漆塗豎櫛 1	豎穴式石槨墓	頸飾, 耳環, 環頭大刀, 鉄劍, 鉄矛, 鉄刀子, 鉄斧, 鉄針, 鉄鋌, 鏝, 硬質土器(高杯, 有蓋高杯, 鉢形器台, 筒形器台, 台付把手付小壺, 台付甗, 有蓋台付壺, 長頸壺, 短頸壺), 軟質鉢, 砥石	5 世紀中葉	宋桂鉉ほか 1993
釜山市 福泉洞 60 号墳 (主槨)	筒形銅器 3	木槨墓	環頭大刀, 鉄矛, 鉄鎌, 鍛造鉄斧, 鉄鎌, 鉄刀子, 鉄タビ, 石斧, 有刺利器, 鉄環, 鏝, 硬質土器(高杯, 炉形器台, 筒形器台, 短頸壺), 瓦質土器(高杯, 短頸壺), 軟質土器(壺)	4 世紀後葉	李在賢ほか 1996
釜山市 福泉洞 64 号墳	筒形銅器 2	木槨墓	環頭大刀, 鉄刀, 鉄矛, 鉄石突, 鉄鎌, 短甲, 鉄斧, 鉄タビ, 鉄刀子, 鏝, 勾玉, 壺, 炉形器台, 高杯	4 世紀	李在賢ほか 1996

釜山市 福泉洞 71 号墳 (主塚)	筒形銅器 2	木槨墓	環頭大刀, 鉄矛, 鉄鎌, 轡, 頸甲, 鉄鎧, 鉄刀子, 鉄鎌, 鉄斧, 鉄鑿, 有刺利器, 鉄鋌, 鏝, 器台, 大壺, 壺, 炉形器台, 高杯, 広口小壺	4 世紀後葉	李在賢ほか 1996
釜山市 東萊貝塚 Fピット 8・10 層	土師器 (甕, 山陰系二 重口縁壺)	貝塚		4 世紀	洪潜植 1997
釜山市 杜邱洞林石 5 号墳	イモガイ? 辻金具 7 イモガイ? 雲珠 1	横口式石室 墓	馬具類 (轡, 杏葉), 鉄刀子, 鉄 鋌, 鏝, 耳飾, 硬質土器 (高杯, 台付盤, 台付長頸壺), 瓦質土器 (高杯, 把手付短頸壺, 短頸壺)	6 世紀後半	朴志明・宋桂 鉉 1990
釜山市 生谷洞加達 4 号墳 (盗掘坑)	三角板鉄留短甲 1	竖穴式石槨 墓	鉄刀, 鉄鎌, 鉄斧, 鉄針, 鉄刀子, 鉄鋌, 硬質土器 (有蓋高杯, 台付 長頸壺)	5 世紀後半	宋桂鉉・洪潜 植 1993
釜山市 五倫台古墳	三角板革綴衝角付冑 1	不明	不明	5 世紀	宋桂鉉 1988
釜山市 蓮山洞 8 号墳	長方板革綴短甲 1 三角板鉄留短甲 1	未報告	未報告	5 世紀後半	申敬澈 1988
伝・釜山市 蓮山洞古墳群	三角板鉄留短甲 1 竖矧細板鉄留眉庇付冑 1	不明	不明	5 世紀?	後藤 1940 穴沢・馬目 1975b
慶南昌原市 三東洞 18 号甕棺墓	仿製内行花文鏡 1	甕棺墓	鉄刀子	4 世紀	安春培 1984
慶南昌原市 三東洞 2 号石棺墓	銅鏡 1	石棺墓	鉄鎌, 鍛造鉄斧, 鉄鎌, ガラス小 玉, 軟質平底短頸壺, 瓦質短頸壺, 硬質短頸壺	4 世紀	安春培 1984
慶南昌原市 加音丁洞貝塚	イモガイ 1 (素材)	貝塚		3~4 世紀	李柱憲ほか 1994
慶南馬山市 県洞 8 号墳	土師器 (布留式系高杯) 1	土壙墓	鉄刀子, 硬質短頸壺	4 世紀後葉 ~5 世紀前葉	李盛周・金亨 坤 1990
慶南晋州市 中安洞 (晋州郡邑内古墳)	獸形鏡 1	不明	不明	5 世紀後半 ~6 世紀前半	国立金海博物 館 1999 朝鮮総督府 1916
慶南晋州市	子持勾玉 1	不明	不明	5 世紀?	朴敬源 1970
慶南鎮海市 龍院 23 号土壙	土師器 1 (高杯)	土壙	硬質把手付杯	4 世紀?	沈奉謹・李東 注 1996
慶南鎮海市 龍院第 5 ピット第 2 層	土師器 1 (高杯片)	貝塚		4 世紀	沈奉謹・李東 注 1996
慶南鎮海市 龍院第 9 ピット混土 貝層	土師器 1 (高杯)	貝塚		4 世紀後半	沈奉謹・李東 注 1996
伝・慶南金海市 良洞里	筒形銅器 16	不明	不明	不明	国立慶州博物 館 1987
慶南金海市 良洞里 90 号墳 (東義大)	中広形銅矛 2 (遺構上部出土)	木槨墓	鉄矛, 鉄斧, 鉄鎌, 首飾, 硬質土 器 (高杯, 短頸壺, 中頸壺, 小型 器台, 小型丸底円口壺, 炉形土器, 両瘤付壺), 軟質甕	4 世紀	林孝澤・郭東 哲 2000
慶南金海市 良洞里 303 号墳 (東義大)	碧玉製紡錘車形石製品 1	未報告	未報告	未報告	東義大学校博 物館 1994

慶南金海市 良洞里 304 号墳 (東義大) (主塚)	筒形銅器 2	石槨墓	環頭大刀, 鉄矛, 鉄鏃, 鉄斧, 有刺利器, 鉄釘, 鏃, 勾玉, 小玉, 硬質土器 (有蓋高杯, 高杯, 蓋, 短頸壺, 有蓋台付壺, 筒形器台, 炉形土器)	4 世紀後葉	林孝澤・郭東哲 2000
(副塚)	筒形銅器 2	木槨墓	鉄斧, 鉄鏃, 轡, 硬質土器 (短頸壺, 小壺付脚杯, 蓋, 小形丸底広口壺, 小形器台, 炉形土器)		
慶南金海市 良洞里 331 号墳 (東義大)	筒形銅器 4	未報告	未報告	未報告	東義大学校博物館 1994
慶南金海市 良洞里 340 号墳 (東義大)	筒形銅器?	木槨墓	鉄矛, 鉄鏃, 冑, 轡, 鉸具, 鉄斧, 鉄鏃, 鉄釘, 硬質土器 (高杯, 短頸壺, 蓋, 台付壺, 兩瘤付短頸壺, 炉形土器, 把杯, 小型丸底短頸壺), 軟質土器 (炉形土器, 甕, 短頸壺)	4 世紀後半	林孝澤・郭東哲 2000
慶南金海市 良洞里 441 号墳 (東義大) (主塚)	仿製方格規矩鏡 1	木槨墓	鉄劍, 鉄鏃, 鉄鏃, 鉄斧, 鉄刀子, 切子玉, 瓦質炉形土器, 硬質土器 (短頸壺, 有蓋壺)	4 世紀中葉	林孝澤・郭東哲 2000
慶南金海市 良洞里 443・447 号墳 (東義大)	筒形銅器 5	木槨墓	未報告	3 世紀~4 世紀	東義大学校博物館 1996
慶南金海市 大成洞 1 号墳 (主塚)	筒形銅器 8	木槨墓	鉄小刀, 鉄矛, 鉄槍, 鉄鏃, 鉄斧, 鉄鏃, 鉄刀子, 鑿形鉄斧, U 字形鋤先, 鉄鋌, 鉸具, 杏葉, 鎧, 馬冑, 鞍橋, 鏃, 鉄楔, 青銅環, ガラス小玉, 硬質土器 (高杯, 有蓋高杯, 広口小壺, 小形器台, 有蓋台付把手付壺, 短頸壺, 鉢形器台, 軟質土器 (器台, 甕), 馬骨)	5 世紀前半	申敬澈・金宰佑 2000 a
慶南金海市 大成洞 2 号墳	筒形銅器 2 巴形銅器 1 綠色凝灰岩製鐵形石製品 2	木槨墓	鉄矛, 鉄槍, 鉄石突, 三枝槍, 鉄鏃, 鉄曲刀子, 鉄斧, 鉄鏃, 鉄鑿, 冑, 短甲, 頸甲, 轡, 鉄鋌, 漢鏡片, 骨鏃, 瑪瑙玉, 雲珠形銅器, 豚骨	4 世紀後葉	申敬澈・金宰佑 2000 a
慶南金海市 大成洞 11 号墳	筒形銅器 1 (上部攪乱層より出土)	木槨墓	鉄矛, 鉄鏃, 冑, 挂甲, 轡, 馬甲, 鉄刀子, 鏃, 楔, 虎形帶鉤, 鉄環, 轡, ガラス小玉, 硬質土器 (蓋, 有蓋高杯, 小形器台, 台付把手付盃, 鉢形器台, 筒形器台)	5 世紀前葉	申敬澈・金宰佑 2000 a
慶南金海市 大成洞 13 号墳 (主塚)	巴形銅器 6 綠色凝灰岩製鐵形石製品 15 滑石製異形石製品 1 直弧文鹿角刀装具 1	木槨墓	鉄刀, 鉄劍, 鉄槍, 鉄鏃, 鉄斧, 鉄刀子, 鉄曲刀子, ガラス小玉, 蠟石製異形石製品, 硬質土器 (短頸壺, 兩耳付短頸壺, 炉形器台)	4 世紀中葉	申敬澈・金宰佑 2000a 申敬澈・金宰佑 2000b 董眞淑ほか 2002
慶南金海市 大成洞 15 号墳	筒形銅器 1	木槨墓	鉄鏃, 鉄鑿, 硬質土器 (短頸壺, 炉形器台)	4 世紀前半	申敬澈・金宰佑 2000 a

慶南金海市 大成洞 18 号墳	筒形銅器 2 綠色凝灰岩製紡錘車形 石製品 1 碧玉製管玉 16 翡翠製勾玉 1	木槨墓	環頭大刀, 鉄矛, 鉄槍, 鉄鏃, 冑, 鉄斧, 鉄鎌, 鉄鑿, 鉄刀子, 鉄鈇, 翡翠製勾玉, 碧玉製管玉, 硬質土 器 (短頸壺, 兩耳付短頸壺, 四耳 付壺, 直口壺, 炉形土器, 炉形器 台)	4 世紀中葉	申敬澈・金宰 佑 2000a 申敬澈・金宰 佑 2000b
慶南金海市 大成洞 23 号墳	巴形銅器片 2	木槨墓	鉄製短劍, 環頭大刀, 鉄曲刀, 鉄 矛, 鉄槍, 鉄鏃, 挂甲, 鉄刀子, 鉄鋌, 鏃, 方格規矩四神鏡, 碧玉 製管玉, 硬質土器 (高杯, 広口小 壺, 短頸壺, 大壺, 炉形器台)	4 世紀中葉	申敬澈・金宰 佑 2000a
慶南金海市 大成洞 39 号墳 (主槨)	筒形銅器 2	木槨墓	鉄大刀, 鉄劍, 鉄矛, 鉄鏃, 短甲, 冑, 頸甲, 腰甲, 鉄斧, 鉄鎌, 鉄 刀子, 鉄鈇, 鏃, 楔, ガラス小玉, 碧玉製勾玉, 硬質土器 (高杯, 有 蓋台付壺, 短頸壺, 炉形器台, 筒 形器台)	4 世紀後葉	申敬澈・金宰 佑 2000a
慶南金海市 大成洞 46 号墳	筒形石製品 (玉杖?) 1	木槨墓	鉄鏃, 鉄斧, ガラス小玉, 硬質短 頸壺, 硬質炉形土器	3 世紀後半	申敬澈・金宰 佑 2000a
慶南金海市 府院洞 A 地区 G2 ピット 第 V 層	土師器 (二重口縁壺)	貝塚		4 世紀	沈奉謹 1981
慶南金海市 水佳里 V 地区 貝塚	土師器 (山陰系二重口 縁壺) 1	貝塚		4 世紀?	申敬澈 1983
慶南金海市 礼安里 77 号墳	イモガイ 貝符 1	木槨墓	鉄矛, 鉄鏃, 鍛造鉄斧, 鉄鎌, 鉄 刀子, 瑪瑙玉, 硬質土器 (長頸壺, コップ形土器, 広口壺, 短頸壺, 器台), 瓦質土器 (短頸壺, 器台), 軟質甕, 土球	4 世紀中葉	安在皓ほか 1993
慶南金海市 三溪洞 杜谷 43 号墳	三角板革綴短甲 1 豎細板鋌留眉庇付冑 1	未報告	未報告	5 世紀?	孫明助ほか 2000
伝・慶南金海	筒形銅器 5	不明	不明	4~5 世紀	湖巖美術館 1997
慶南梁山市 夫婦塚	硬玉製勾玉 3	横口式石室	環頭大刀, 大刀, 弓, 鉄鏃, 馬具 (鞍, 轡, 鐙, 馬鐸, 杏葉, 雲珠, 蛇行状鉄器), 鉄刀子, 鉄鈇, 金 銅冠, 冠帽, 耳飾, 頸飾, 釧, 腕 玉, 指輪, 帶金具, 腰佩, 金銅飾 履, 硬質土器 (長頸壺, 台付長頸 壺, 鉢形器台, 筒形器台, 高杯, 有台把手付盃), 軟質土器 (有蓋 小型甕, 有蓋有台盃, 有蓋盃), 鉄釜	5 世紀後葉	小川 1927 早乙女・早川 1997
慶南梁山市内古墳	七乳鏡 1	不明	不明	5 世紀後半 ~6 世紀前半	梅原 1932
慶南宜寧郡 泉谷里 21 号墳	提瓶 1	豎穴式石槨 墓	硬質土器 (長頸壺, 把手付杯, 蓋 杯)	6 世紀前半	김현섭・김수 경 1997
伝・慶南宜寧	須恵器甕 1	不明	不明	5 世紀後半	酒井 1993

慶南咸安郡 末伊山 34 号墳	直弧文鹿角刀装具 1	竪穴式石槨	鉄刀, 鉄矛, 鉄鏃, 挂甲, 馬具 (鞍, 杏葉), 鉄刀子, 鉄斧, 鉄鎌, 鉄釘, 鉄鉤金具, 鏝, ガラス小玉, 硬質土器 (高杯, 長頸壺, コップ 形土器, 脚付壺, 大壺, 大甕, 把 手付有台盤, 筒形器台, 車輪付土 器, 水鳥形土器), 漆器片	5 世紀中葉	今西 1920
慶南咸安郡 道項里 13 号墳	三角板革綴短甲 1	木槨墓	鉄刀, 鉄劍, 鉄矛, 鉄鏃, 馬具類 (轡, 鐙), 有刺利器, 鉄斧, 鉄鎌, 鉄刀子, 鏝, 鉄釘, 硬質土器 (有 蓋高杯, 小型器台, コップ形土器, 甕, 台付壺, 把手付小壺, 筒形器 台, 鉢形器台, 短頸壺, 長頸壺, 直口壺)	5 世紀前半	崔鍾圭ほか 2000
慶南咸安郡 沙道里	筒形銅器 3	不明	不明	5 世紀前半	崔鍾圭 1982 崔鍾圭・禹枝 南 1992
慶南昌寧郡 校洞 11 号墳	イモガイ辻金具 4 イモガイ雲珠 1	横穴式石室	有銘円頭大刀, 環頭大刀, 鉄矛, 馬具類 (轡, 杏葉, 鞍), 鎧, 冠 帽, 鈔帶, 玉類, 釧, 耳環, 銅鈴, 金属容器 (鏝斗, 釜, 甕), 土器 類	6 世紀前半?	穴沢・馬目 1975a
慶南昌寧郡 校洞 89 号墳	直弧文鹿角装鉄劍 1	横穴式石室	三葉文環頭大刀, 鉄矛, 鉄鏃, 鑄 造鉄斧, 環頭鉄刀子, 馬鐸, 耳飾, 冠金具, ガラストンボ玉, 銀帶金 具, 銀腰佩金具, 硬質土器 (有蓋 高杯, 長頸壺)	5 世紀後半	穴沢・馬目 1975a
慶南昌寧郡 校洞 3 号墳	三角板横矧板併用鋌留 短甲 1	横口式石室	金耳環, 銀鈔帶, 環頭大刀, 鉄劍, 鉄刀, 鉄矛, 鉄鏃, 馬具類 (轡, 鐙, 杏葉), 挂甲, 鉄冠帽, 鉄斧, 鉄手斧, 手鎌, 鉄刀子, U 字形鋤 先, 矛形鉄器, 有刺利器, 鏝, 硬 質土器 (有蓋長頸壺, 長頸壺, 台 付長頸壺, コップ形土器, 有台盤, 蓋杯, 有蓋高杯, 高杯), 軟質鉄, 砥石	5 世紀中葉	沈奉謹ほか 1992
慶南固城郡 松鶴洞 1B-1 号墳	イモガイ辻金具 須恵器 (蓋杯, 甕)	横穴式石室	鉄鏃, 馬具類 (轡, 雲珠), 鉄斧, 鉄鎌, 鏝, 玉類, 硬質土器 (有台 長頸壺, 大壺, 甕, 蓋杯)	6 世紀前半	東亜大学校博 物館 2001
慶南山清郡 丹城面	イモガイ雲珠 6	不明	不明	6 世紀	東京国立博物 館 1982
慶南山清郡 生草 9 号墳	珠文鏡 1 須恵器 (蓋杯, 高杯)	竪穴式石槨	未報告	6 世紀前半	宋永鎮 2002
慶南咸陽郡 上栢里古墳群	三角板鋌留短甲 1	竪穴式石 槨?	不明	5 世紀?	金東鎬 1972
慶南陝川郡 玉田 28 号墳	横矧板鋌留短甲 1	竪穴式石槨	環頭大刀, 鉄矛, 鉄鏃, 盛矢具, 冑, 挂甲, 馬具類 (轡, 鞍, 鐙, 馬冑, 馬甲), 硬質土器	5 世紀中葉	趙榮済ほか 1997
慶南陝川郡 玉田 68 号墳	三角板革綴短甲 1	木槨墓	環頭大刀, 鉄鏃, 馬具類 (鞍, 鐙, 轡, 雲珠), 硬質土器 (高杯, コッ プ形土器, 器台, 短頸壺), 土球	5 世紀前半	趙榮済ほか 1995
慶南陝川郡 鳳溪里 20 号墳	須恵器 (無蓋高杯) 1	竪穴式石槨	鉄劍, 鉄矛, 鉄鏃, 鍛造鉄斧, 鉄 鎌, 硬質土器 (長頸壺, 有蓋高杯)	5 世紀後半	沈奉謹 1986

韓國의 倭系遺物 加耶地域出土의 倭系遺物을 중심으로

高久健二

本稿에서는 加耶지역 출토의 倭系遺物을 종합적으로 해석하여, 韓國의 對倭交涉의 실태 및 그 변화를 밝히는 것을 목적으로 한다. 구체적으로는 加耶지역 출토의 倭系遺物을 3世紀後半~5世紀前葉과 5世紀中葉~6世紀前半의 두 시기로 나누어, 그 출토양상, 분포, 시기에 관하여 검토했다. 그 결과, 우선 3世紀後半~4世紀에는, 大成洞古墳群의 倭系遺物이 주목되는데, 특히 大型木槨墓인 大成洞13號墳에 여러 倭系遺物이 副葬되어 있는 점에서, 倭와의 교섭을 주도했던 것은 金海의 上位階層으로, 이들을 통해 倭系遺物이 셋트로 전해진 것으로 추정했다. 또, 南部地域出土의 土師器 및 土師器系土器는 그 양상으로 보아, 3世紀後葉~5世紀前葉에 倭로부터 渡來한 사람들이 토착집단과 더불어 일정 기간 생활하고 있었던 것을 나타내고 있으나, 倭人집단이 수세기에 걸쳐 장기간 定住했을 가능성은 적을 것으로 생각된다. 따라서, 그 목적은 정치적인 이주가 아닌, 南部地域의 鐵을 입수하기 위한 비교적 단기간의 단속적인 渡來가 아니었던가 추정된다. 또, 倭系遺物의 분포가 남부해안지역에 집중되어 있고, 내륙부에서는 거의 출토되고 있지 않는 점으로 보아, 당시의 對倭교섭의 창구가 남부지역에 한정되어 있었다고 생각된다.

5世紀中葉~6世紀前半이 되면, 내륙지역에서도 倭系遺物이 출토되게 되어, 前時期에 비해서 분포 영역이 확대됨을 알 수 있다. 특히, 大伽耶의 중심지인 高靈地域에서는, 池山洞古墳群 등에서 倭系遺物이 비교적 많이 출토되고 있다. 그러나, 倭系遺物의 분포 확대가, 그대로 倭人의 행동범위 확대를 의미하는 것이 아니고, 5世紀 후반 이후에도 倭가 加耶와 직접 교섭하는 지역은, 南部海岸地域에 집중하고 있었을 가능성이 높다. 5世紀後半이 되면 내륙의 大伽耶地域과 남부해안의 固城지역과의 네트워크가 확립되어, 倭系遺物의 분포가 내륙지역에 확대된 것으로 생각된다. 즉, 倭系遺物의 확대는 이와 같은 네트워크를 배경으로 하여 남부해안지역으로부터 내륙부로 재분배되는 결과로, 加耶에 있어서 倭人의 활동범위는 상당히 한정되어 있었던 것으로 추정된다.

Wa-style Relics in Korea: Wa-style Relics Excavated in the Gaya Region

TAKAKU, Kenji

This paper makes a comprehensive analysis of Wa-style relics that have been excavated in Gaya, with the aim of shedding light on relations that the Korean side had with Wa and changes in those relations. More specifically, this involved an examination of Wa-style relics that have been excavated in the region of Gaya, by examining aspects such as their excavation, distribution and dates by dividing them into one of two periods: the second half of the 3rd century through to early 5th century and the middle of the 5th century through to the first half of the 6th century. Wa-style relics of note that derive from the second half of the 3rd century through the 4th century have been found at the Daeseong-dong burial mounds. Of particular interest are the numerous Wa-style relics found in Daeseong-dong burial mound No. 13, which is a large wooden chamber tomb, that are funerary accessories and from which one may conjecture that it was through the upper class in Kimhae, who led relations with Wa, that these Wa-style relics were brought to Gaya as a set. Also, judging from the Haji pottery and Haji-style pottery excavated in southern regions, it would appear that the people that came over from Wa from the latter part of the 3rd century through to early in the 5th century lived for a period of time together with local inhabitants. However, it is not considered very likely that the groups of visitors from Wa settled there for a period lasting several generations. Accordingly, we may conjecture that the reason was not a political migration, but that they went to the southern regions intermittently for a short period of time in order to procure iron. Furthermore, considering that the distribution of Wa-style relics is concentrated in southern coastal regions with very few having been excavated from areas further inland, we may surmise that during that period points of contact for relations with Wa were limited to the southern region.

Wa-style relics dating from the middle of the 5th century through to the early 6th century have also been found further inland, with a wider distribution than that for the previous period. Wa-style relics have been found in relatively large quantities in the Jisan-dong burial mounds located in the Koryong region located in the center of Dae Gaya. However, the wider distribution of Wa-style relics does not in itself signify that the sphere of activity of the Wa people expanded, but suggests the possibility that from the latter half of the 5th century the

regions in Gaya with which Wa had direct relations were concentrated along the southern coast. By the latter half of the 5th century, networks had been established with inland parts of Dae Gaya and with regions such as Goseong along the southern coast, and it is conceivable that this was the reason for the expansion of the distribution of Wa-style relics into inland regions. In other words, the increase in Wa-style relics is the result of re-distribution from southern coastal regions further inland and is related to the existence of these kinds of networks, and we may conjecture that the sphere of activity of people from Wa was fairly limited.